



心の糧

十二使徒会補助

ヘンリー・D・テイラー



10月のこよみ

主はある人々に大なる信仰の力を有し、それを行行使するための賜物と能力を付与された。ヘンリー・A・ディクソンはその1人である。結婚して多くの子供を抱えていたにもかかわらず、彼は大会長会よりイギリスへの伝道の召しを受けると、いささかのためらいも見せず、その召しを受けた。3人の同僚と共にディクソン長老はニューファウンドランドのセントジョン島より汽船アリゾナ号に乗り込んだ。

途中すさまじい嵐に出会い、宣教師たちは就寝前の祈りの準備をしていると、船全体を揺り動かすような激しいショックを感じた。急いで甲板に出てみると、全速力で航行していた船は巨大な氷山に激突していた。船首に大きな穴があき、吃水線にまで及んでいた。もし海が穏やかであれば、約250マイル離れた一番近い港まで運航できるのだがと船長が話した。

風と嵐はいっこうにおさまらなかった。ディクソン長老は眠れずに何時間も横になっていたが、やがて起き上がると、服をつけ、甲板の方に歩いて行った。ディクソン長老はまっくらな海に向かって1人立つと、謙遜になり、大きな信仰を抱いて聖なる神権の権能により、波を叱責し、静まるよう命じた。

36時間後、船はセントジョン港に帰港し、ドックに入った。ディクソン長老が約束した通り、1人の死者も出なかった。

船主のガイオン氏が事故の模様を聞き、モルモンの宣教師たちが乗船していたことを知って、このように言った。「全く心配していませんよ。私の船はモルモンの宣教師を40年間運んでいます。そしてモルモンの宣教師を乗せた船が沈没したことは、一度もありませんでしたから。」

— も く じ —

闇より出でて……………	ジョセフ・フィールディング・スミス…	277
鉄の棒と世界的な不安への対策……………	第一副管長 ハロルド・B・リー…	280
きょう選びなさい……………	第二副管長 N・エルドン・タナー…	286
なかよしジュール……………		291
過去、現在、未来からの声……………	スペンサー・W・キンボール…	295
怒るにおそかれ……………	エルレイ・L・クリスチャンセン…	299
迷える大軍……………	トーマス・S・モンソン…	301
永遠の結婚へのおや石……………	ゴードン・B・ヒンクレー…	304

- 6日 1867年 第1回総大会、ソルトレーク・タバナクルで開かる。
- 9日 1867年 世界的に有名なソルトレーク・タバナクルが献堂さる。
- 10日 1880年 ジョン・テイラー教会の第3代目大会長として支持さる。
- 14日 1855年 最初のドイツ人改宗者カール・G・メーザー、バプテスマを受ける。
- 17日 1901年 ジョセフ・F・スミス教会の第6代目大会長として支持さる。
- 23日 1947年 日本において伝道部再開さる。
- 27日 1961年 スイスステーク部組織さる。

今月の表紙

今月の表紙はユタ州ソルトレーク市にある歴史的に名高いモルモンタバナクルで開かれた第141回年次総大会の写真を複写したものである。本号には大会での説教が収録されている。

聖徒の道

1971年10月20日発行
発行人兼編集人 ウォルターR. ビルス
発行所 東京都港区南麻布5-8-10
末日聖徒イエス・キリスト教会
電話(442) 7459
印刷所 太陽印刷工業株式会社
定価 100円
予約 年間 1,000円
外国 4ドル50セント

闇より出でて

末日聖徒イエス・キリスト教会大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹

我々はあなたがたと、ラジオ、テレビを通じて見聞きしているすべての人々を歓迎する。我々はあなたがたとを末日聖徒イエス・キリスト教会、第141回年次総大会に歓迎する。

我々は今日、主を待ち受け、霊と真をもって礼拝し、命のパンを食べ、主の教会の諸業務を管理するよう主が選んだ者より助言と教えを受けるためにここにいる。

私はここに参加しているすべての人々、生きているすべての人々がこの大会を通じて何がしかの形で心を動かされ、「みたま」に調和して、信仰と証を築き、戒めを守り、主に喜ばれることをなそうという望みを持つよう心から希望している。

我々は主の業に携わっている。これは主の教会である。主が救いの計画を立てられた。そしてそれはこの時代に天が開かれて我々が受けた主の福音である。それゆえ、人生における我々の望みと目的は、主が明らかにされた真理を信じ、真理に従って生きることではない。教会の内外を問わず、いかなる人も神のみことと一致しない教えを信じたり、慣習を提唱したり、主張を支持すべきではない。救いの真理に関する我々の目的はただ一つ、すなわち主が明らかにされたことを見出だし、それを信じ、行なうことでなければならない。

主は今日永遠の福音を明らかにし、末日聖徒イエ

ス・キリスト教会をその救いの真理の管理人、配布する者としたもうたので、私は今教会と世に対し、救われたいと思う人が受け入れねばならないこれらの永遠の原則をいくつか述べてみたい。これらの簡潔でしかも深遠な教えはこの神権時代に啓示によって我々にもたらされた。

我々は天父が栄光を得られ、昇栄されたお方であって、あらゆる権能、力、支配権を持ち、万物を知りたもうお方であることを知っている。我々は神がその生みたまいし独り子を通してこの地球と、無数の世界を創造され、そのすべての世界には神の霊の子らが住んでいることを証する。

我々は神が限りなく永遠であり、霊の子らが進歩発展し、神のようになることができるように律法を定められたことを証する。

我々は、救いがキリストのうちにあること、キリストが永遠の御父の初子であり、天の会議で選ばれ予任されて、限りない永遠の贖いをなしとげられたこと、キリストが神の御子として世に生まれ、福音により命と不死不滅と光明をもたらしたことを知っている。

我々はキリストがアダムの墮落により世にもたらされた肉体の死と霊の死から人々を贖い、悔い改めを条件に全人類の罪を御自身に引き受けられたことが間違いなく確かなものであることを信じている。

我々はイエス・キリストの福音が救いの計画であ



ること、主の贖いの犠牲により全人類はよみがえって不死不滅となり、肉においてなした行ないによって主より裁きを受けること、福音の律法をすべて信じて従う者はよみがえって御父の王国で永遠の生命を受けることを証する。

我々は恵みにより、我々がなしうるすべてを尽くすことによって救われ、キリストの贖いの基の上に築き上げることにより、すべての人は主の前に恐れおののいて自らの救いをなしとげなければならないことを信じている。

人が救いを得るには、主イエス・キリストを信じ自らの罪を悔い改め、権能を持つ者により水に沈めらるるバプテスマを受け、按手により聖霊の賜を受けて、キリストを離れず前進し、戒めを守り、終りまで耐え忍ばなければならないことを我々は宣言する。

この救いの計画、すなわちこの福音の計画は最初の人、父祖アダムに始まってその後の神権時代において人々に明らかにされてきた。エノク、ノア、アブラハム、モーセにも知らされた。またアメリカ大陸の先住民にもはっきりと知らされた。この福音は時の絶頂の神権時代に住んだイエス、ペテロ、パウロ、および初期の聖徒が教えたものと同じ福音である。我々はこれを宣言する。

さらに、これは現在生きているすべての人にとって非常に大切なことであるが、闇と不信仰と純粋で完全なキリスト教の真理から離れていた長い夜の後無限の知恵を持ちたもう主が不滅の全き福音を地に回復されたことを我々は信じている。

我々はジョセフ・スミスが予言者であること、御父と御子がこの最後の福音の神権時代をもたらすため1820年の春にジョセフ・スミスに現われたまい、また彼が神の賜物と力によりモルモン経を翻訳したことを知っている。また我々は彼が天使より鍵と権能を受けたこと、主がジョセフ・スミスに救いの教義を明らかにしたもうたことを知っている。

我々は末日聖徒イエス・キリスト教会が地上における神の王国であって、真の救いの教えを学び、聖なる神権の権能を見出すことのできる唯一の場所であることを宣言する。

我々は聖霊が啓示を与えるお方であって、イエス・キリストが神の御子であること、ジョセフ・スミスが予言者であること、およびこの教会が「全地の面に於ける唯一の真にして生命ある教会」（教義と聖約1：30参照）であることを証したもうことを信じている。

もはや人は闇にとどまっている必要がない。永遠の福音の光がここにある。心から尋ね求める者はすべて主の業が真であり神の業であることの証を聖霊より受ける。

ペテロはこのように述べている。「神は人のかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受け入れて下さる。」（使徒行伝10：34～35）すなわち主は忠実な者がこの宗教が真実なものであることを知るように主の「みたま」を注ぎたもうのである。

さて、あなたがたは、主が福音を回復し、主の王国を最後の機会として立てられたことを聖霊の力によって知るようになったが、私はこれらが真理であることを証する。

私は神が生きてましまし、イエス・キリストが御父の生みたまいし独り子であり、ジョセフ・スミスとその後継者が主のみ手の中の道具となり、現代の人々に天の祝福にあずかることを可能にしたことを知っている。

願わくは、教会の内外において、地における主の目的がすみやかに果たされ、主が忠実な聖徒を祝福したまい、真理を求め主の前に心の正しい人々が我々と共に回復された福音の全き恵みを受け継ぐように祈る。

これらを主イエス・キリストのみ名により祈り奉る。アーメン。

鉄の棒と世界的な 不安への対策

この予言のいくつかを読むが、今日私たちを取り巻いている状態を同時に考えていただきたい。

「あなたがたが心の中に誇り高ぶることと、あなたたちの中に……ねたみ、争い、怨み、迫害し、あらゆる悪い事を起すほどにおごり高ぶっていない者は僅しかないことと、またあなたがたの慢心によって……すでに汚れ果てていると言うことが前以て私に解っている。

ごらん、あなたがたは金銭と自分の財産と自分の華やかな衣と自分の教会の華やかな飾り物とを、貧しい人々、病気の人々および悩んでいる人々よりも愛するのである。」(モルモン8:36-37)

使徒パウロも苦難の時代を指して語っている。「その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、無情な者、融和しない者、そしめる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快楽を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。」(Ⅱテモテ3:2-5)

自ら信心深い、またキリスト教徒と名乗る者は多い。そういう人は、「聖典を靈感と道徳的な真理の源泉としてしか受け入れず」とりすまして、「神の啓示によって私たちは主の使いがリーハイに話したように、神の王国へと続く手すりを見出すことができるのだろうか、それとも単なる指針にすぎないのだろうか」と質問するのである。

不幸にも教会員と称する者の中に、リーハイが示現で見たあざける者と幾分か似た者がいる。彼らは教会幹部を福音に関する神の特別の証人としてまた教会の諸業務を指示する神の代理人として受けいれている忠実な人々から離れ、あざ笑うような傾向にあるようである。

教会には、自らを自由主義者と主張し、かつての

大管長が述べたように、「自らのうめぼれの灯によって読む」者たちがいる。(ジョセフ・F・スミス「福音の教義」P.373[英文]) 私はかつて教会の教育指導者の一人に自由主義者をどのように定義するか尋ねたことがある。彼は一言でこう答えた。「教会内の自由主義者とは、証を持っていない人、これだけです。」

かつての十二使徒評議員ですぐれた教育者であったジョン・A・ウィットソー博士は、教会内の自由主義者に関して次のように述べている。

「(教会内で)自らを自由主義者と称する者は、通常自らの属している組織の基本原則または指導原理を破っている者であり、組織の会員であると主張しながら、その基本原則を信じておらず、基礎をゆるがして組織を改革しようとしている者である。

もしその宗教が不変の真理の上に建てられていると主張しているならば、自由主義を宗教と呼ぶのはばかげている。」

そしてウィットソー博士は、このように結んでいる。「自分たちがまたは彼らの教会が自由主義に基づいていると宣言しようとしている人々に充分気をつけるべきである。彼らの信仰の家は砂の上に建てられていて、真理の嵐に耐えられない公算が強いからである。」(「証拠と一致」インプルーヴメント・エラ、第44巻、1941年、P.609)

ここで再びリーハイの示現での言葉を用いるならば、彼らは暗黒の霧で目が見えなくなり、しかも鉄の棒にしっかりととりついていない人々である。

主がいまだ答えを明らかにするに適さないと見られたため、答えられていない疑問がある時、アブラハム・リンカーンが断言したように、「私は聖書を読み理解できたことをすべて受け入れる。そしてその他は信仰によって受け入れる」と言うことができる。とすれば、それはすばらしいことではないであろうか。

地球がどのようにして創造されたか、人はどのようになるのかなどという疑問がわいた時、知識界で不安をおぼえている人々が、かの有名な科学者であり忠実な教会員であった彼のように答えることができるか。ある姉妹が、「なぜ主はこれらのことについてはっきりと述べられなかったのですか」と質問したのに対し、かの科学者は、「もし主がそうされたとしても私たちは理解できないでしょう。それは8歳の子供に原子力の理論を説明しようとするのと同じようなものだからです。」

もしこの世の学問を修めた人すべてが、人による理論にまどわされて不信仰と背教という暗い流れに落ちるのでなく、信仰によって理解へと導く「鉄の棒」あるいは神のみ言葉にしっかりととりつくことができるか、それはすばらしいことではないだろうか。

私は教会のある有名な科学者が、こう語るのを聞いた。「想像以上に多くの大学教授がアダムの墮落と救い主の贖いを哲学的に説明したり、思考したりして教会を去っている。」と語ったのを聞いたことがある。これは主が予言者を通じて説明されたこと、また聖なる場所でさらに完全に明かされた「神の奥義」を理解できるよう人々に明らかにされたことよりも、人の哲学の方を受け入れたためなのである。

明らかに主の時代にも同様の疑問や論争が展開されていた。主は簡潔な答えの中で、不確実な事柄に埋没するのを避けるための原則を示しておられる。

弟子たちが神の王国でだれが一番偉いかということに関して論争していたが、主はそれを静めるために言われた。「心をいれかえて幼な子のようにならないければ、天国にはいることはできないであろう」(マタイ18:3)

聖典によれば、心をいれかえるということは、心

を変えて、罪により支配されていた人の道徳観念を義の生活へと方向転換するという意味である。祈りが答えられ、使徒の時代の信仰の擁護者であったシプリアンのように心に証を受けるまで、「主に忍耐強く仕えよ」(教義と聖約98:2)という意味である。シプリアンの言葉を引用しよう。「あらゆる罪から清められた私の心に、いと高き所よりもたらされた光が入り、そして突然驚くべき方法で私はたしかに疑問が解けた。」

改宗とは単に什分の一の領収書、会員記録、神殿推薦状等を持つ「正式」な教会員であるという意味だけではない。批判的な性癖を克服し、外見的でなく内面的な弱点を改善しようと絶えず努力するという意味である。

主は人々の信仰を破壊しようとする者、神のみ言葉から遠ざけさせようとする者、「鉄の棒」から手をはなさせようとする者に対し警告を発しておられる。鉄の棒は神の贖い主と、この地球と民に関する主の目的に対する信仰を持つものを守っているのである。

主は警告しておられる。「しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる。」(マタイ18:6)

主は真に信じている者を破滅に追いやるようなことをするよりも、またそのことにより自らの永遠の行く末を危険にさらすような罰を招くよりも、その人はこの世の死を受ける方が良いと強調しておられる。

使徒パウロも悪い模範によって誤った教えを与えることの危険を強調している。「しかし、あなたがたのこの自由が、弱い者たちのつまずきにならないように、気をつけなさい。」

するとその弱い人は、あなたの知識によって滅びることになる。この弱い兄弟のためにも、キリスト

鉄の棒と世界的な 不安への対策

は死なれたのである。このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、その弱い良心を痛めるのは、キリストに対して罪を犯すことなのである。」

(I コリント 8 : 9, 11-12)

予言者ヤコブは学問があり、へりくつを並べる人々に関して、今日も繰返し述べる必要があると思われることを述べている。「人間は学問があると自分は賢いと思って神の訓戒に耳をかさず、自分独りで解ると思って神の訓戒をうち捨てるから、その智慧は愚であって何の益にもならず、かれらはついに亡びるのである。しかし、人間がもしも神の訓戒に従うならば、学問のあるのも善いことである。」(II ニーフティ 9 : 28-29)

教会の内外において、実業界で高い地位にある人々、政府機関の人々、法に関係する人々、医師、社会事業家、看護婦、科学界芸術界の人々で、忠実で献身的な人々の多いことを私たちは主に心から感謝している。特に教会において指導者の責任を引き受けている人々、ホーム・ティーチャーや神権組織、補助組織においてクラスの指導者として働いている人々、全世界で教会の内外で恵まれぬ者たちに心を配り、未亡人や孤児の必要に特別の注意を払っている人々に感謝している。

私はイエスがザアカイに言われたように、これらすべての人々に申しあげる。「きょう、救いが彼らの家に来た。」(ルカ 19 : 9 参照) これらの人は、私たちすべてを安全に命の木に導くことのできる「鉄の棒」にしっかりとついている人である。

最近私はワシントンポスト紙のある欄で、自ら「マウントバーノンの隠とん者」と称するジョージ・ムーアの記事を読んだ。(マウントバーノンとはもちろんジョージ・ワシントンの祖先の家のことである。) この記事でムーアは次のように述べている。「私がこれまでマウントバーノンで過ごした20年間

は人が自分の無知を減らさなければ何も知ることができないと主張している。この記事でムーアはジョージ・ワシントンについて非常に鮮明な観察を述べている。

「ワシントンは学校へ行かなかった。このため彼を教育のある人と言うことができるのである。勉強を終えるということがなかったからである。」

ジョージ・ムーアが自分を指して述べた言葉はあなたがたの多くと私自身についても言うことができると思う。「私は60年以上を過ごした人生で無知を減らすことにつとめてきた。」

この言葉の中には、いかなる分野においても秀でるというチャレンジがすべての人に与えられていると私は考えている。ある人は学校を卒業すると勉強をやめてしまう。ある人は教会で伝道を終えると福音の勉強をやめてしまう。ある人は教会内外で管理者になったり、高い地位を得ると勉強をやめてしまう。

ジョージ・ムーアがワシントンについて語った言葉を忘れてはならない。「もし勉強をやめないならば、たとえどのような地位にあろうとも私たちは教育のある人になることができる。」

故ドワイト・D・アイゼンハワー大統領はこのように記している、「自分の仕事をよく果たしている人、冷笑家や責任をのがれる人の冷笑にかき乱されることなく正しく自信を持っている人、正しい動機から離れず、他人を思いやる人は本質的に指導者である。特に選ばれて名声を得ているいなかかわらず、その人は必ずすぐれた仕事をし、心に大きな満足を得る。

ついでながら、主が私たちをこの地上に送られた目的はここにある。」(「指導性とは何か」リーダーズ・ダイジェスト、1965年6月、P. 54)

イエス・キリストの真の福音の回復と、時満ちたる神権時代における教会の設立と共に、私たちは啓

示を通して数々の教えを与えられた。故ブリガム・H・ロバーツ長老の説明によれば、「バプテスマが水に沈められるべきか、罪の許しのために行なわれるべきかということだけでなく、歴史を通じて蓄積されたごみを一掃し、岩があらわにされ、神の王国の礎が再び置かれたのである。」

多くの人々は末日聖徒イエス・キリスト教会の教えの中に世の落し穴、不満、邪悪から守るものが見出されると宣言するのは不合理であると考えているようである。天で立案された救いの計画は永遠の生命に至る狭くて細い道をはっきりと示している。だが多くの人はその道に従うことを拒んでいる。

主は大いなる啓示の中で初期の時代の教会指導者に、多くの分野で真理を求める者となるよう戒めとして指示を与えられた。

第1はもちろん、「汝ら互いにこの王国の教義と神の王国に就けるすべてのことを教ゆべし」と戒められたことである。(教義と聖約88:77-78参照)

ついで主は私たちに広範囲な学問を求めるよう勧めておられる。主の教会はこの世の種々の学問の分野について全く知らずに運営されるべきではない。

また主は信仰を持たないその他の人々に対して啓示を与えられている。「また正に研究と信仰によりて学問を求むべし。」(教義と聖約88:118)

どのようにして「信仰によって学問をするのか」と尋ねる人がいるであろう。ある予言者がその方法を説明している。第1に、主のみ言葉を能力をつくして試し、信じようとする望みを持たなければならない。この望みを働かせて、主のみ言葉の一部を自分のものとしてできるようにしようではないか。そこで、蒔いた種と同じように、主のみ言葉を育み世に生まれるすべての人を照らす主の「みたま」を拒まないようにしなければならない。そうすれば主のみ言葉が良いものであると感じ始めることができる。なぜならば、主のみ言葉はあなたの心を大

きく開き、理解力を増し、リーハイの示現の中の木の実のように、良い味を感じるからである。(アルマ32参照)

ある英国の小説家は次のように述べている。「神を探し求めている者はすでに神を見出しているのである。」

「信仰によって学ぶ」とは、安易な怠惰な方法で知識を得、それが知恵となることであるなどと考えてはならない。

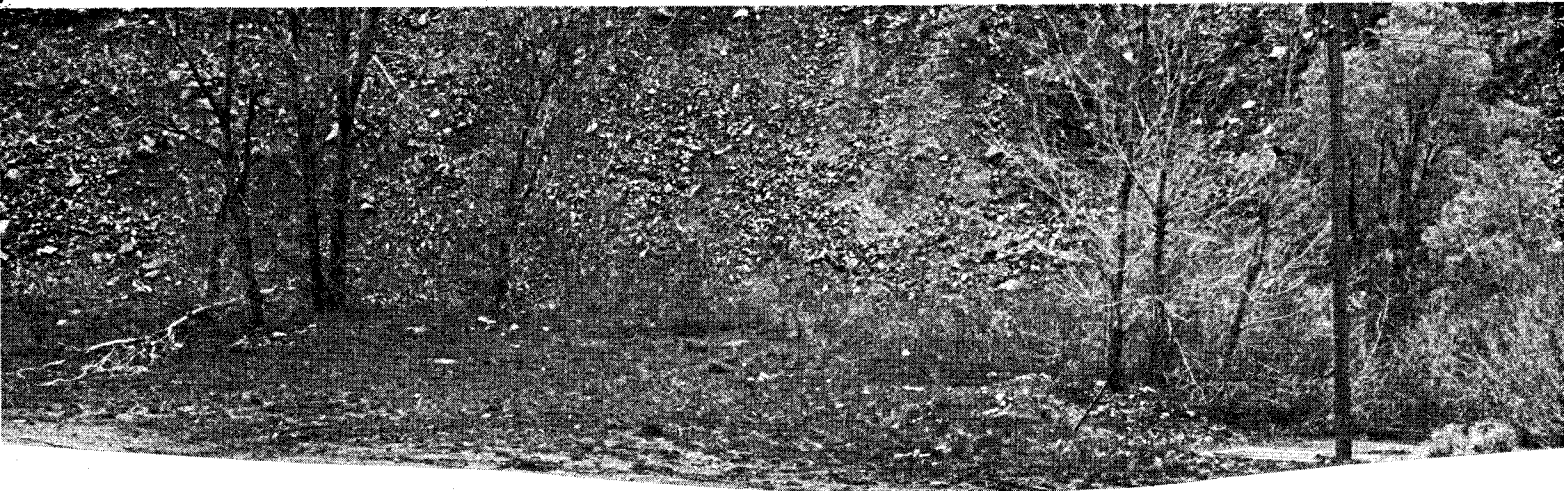
天よりの教えと、天の導きを勤勉に求めたほとんどの人の経験から、信仰によって学ぶには、主の聖き「みたま」と調和できるようにふさわしい生活をして全霊を傾け、知恵の限りを尽くし、自らの努力と「みたま」による真の証を結びつけることが必要であることを悟るであろう。

この教会の使命は、福音の真理を証し、人々の心の錨となるべきまっすぐな道を見出していないすべての人を脅かしている不安感と無目的の原因であるあらゆる誤った教えから遠ざけさせることにある。

私はキリストの真の光を全世界に輝かすことができるように心から祈っている。研究と祈りと信仰により、私と同じようにあらゆる人が、ラザロの死に不平を言っていたマルタに主が言われたように、主はまことに「よみがえりであり、命であり、主を信じる者は、たとえ死んでも生きる。また主に従って生活し、主を信じる者は、いつまでも死なない。」ことは確かに知ることができるよう私は願っている。(ヨハネ11:25-26参照)

私はマルタやペテロのように、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」(マタイ16:16)、「主よ信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」(ヨハネ11:27)と答えることができることを主に感謝している。

私はこの厳粛な証を主イエス・キリストの聖き名を通して述べる。アーメン。



「きょう、 選 び な さ い」

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

私 たちは今まで最後の説教を非常にたくさん聞いてきた。話をする人々は、それを最後の説教と考えて各々主題を選んだのである。私はそのことを考えながら、この大会で私の最後の話、すなわち私が人々に残すことのできる最も大切な話をするものとして、主題を選んだ。

私の選んだ主題はヨシュアの言葉から取ったものである。「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」(ヨシュア24:15)

ヨシュアはこのように語って間もなく、これを告別の言葉として110歳で世を去った。

私たちはこれまで、この大会ですばらしい話を聞き、またこれから話す人の話に耳を傾けるが、すべての話が主に仕えることの大切さを強調していることにあなたがたはきっと気づくことと思う。

私たちはモーセがイスラエルの子らをどのようにして束縛の地から導き出し、エジプト人が紅海でどのように滅ぼされたかを知っている。主がイスラエルに住むべき地を与えるため、どのようにしてアモリ人とエリコの民を彼らの手に渡されたか、ヨシュアがどのようにして民に次のごとき主の言葉を思い起こさせたか知っている。

「そしてわたしは、あなたがたが自分で労しなかった地を、あなたがたに与え、あなたがたが建てなかった町を、あなたがたに与えた。そしてあなたがたはいまその所に住んでいる。あなたがたはまた自分で作らなかったぶどう畑と、オリーブ畑の実を食べている。」

そして、ヨシュアは言った。「それゆえ、いま、あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実とをもって、主に仕え、あなたがたの先祖が、川

の向こう、およびエジプトで仕えた他の神々を除き去って、主に仕えなさい。もしあなたがたが主に仕えることを、ころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも、あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」

次いでヨシュアはこのように警告している。「もしあなたがたが主を捨てて、異なる神々に仕えるならば、あなたがたにさいわいを下されたのちに、ひるがえってあなたがたに災をくだし、あなたがたを滅ぼしつくされるであろう。」驚いた民は答えた。「われわれの神、主に、われわれは仕え、その声に聞きしたがいます。」(ヨシュア 24:13-15, 20, 24)

これと同じことが、私たちの先祖の開拓者の歴史にも見られる。宗教上の確信のゆえに開拓者たちは美しい町と家を捨てなければならなかったのである。開拓者は多くの苦難を受け、多くの者が死んだが、自らの信仰に忠実であった。平原を横切る苦難の時でさえ、彼らは、「旅を終らず死すも、すべては善し」と歌ったのである。開拓者たちは主なる神のみ名をたたえ、主に仕え続けた。主は彼らの正しい努力のゆえに彼らを祝福し、繁栄をもたらしたもうたのである。

聖典を読む時、世界の歴史を読む時、私たちは主に仕えることを選んだ個人、社会、国家までが、人としての特質によるだけでなく、神のみこころにより救われ、繁栄した例を無数に見出すことができる。一方、このようにすることを拒んだ者たちは主の怒りを受け、くじかれ、破滅を受けた。

モルモン経にはこのように記録されている。「ごらん、この土地はすぐれた土地であるから、この土地を所有する民はこの地の神に事えさえすれば、奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からも支配を受けることがない。この地の神とは…イエス・キリストである。」(イテル2:12)

何とすばらしい約束であろうか。しかし、ヨシュアの警告の中にも同じ「もし」という条件を見出す

ことができる。「もしあなたがたが主を捨てて、異なる神々に仕えるならば、…ひるがえってあなたがたに災をくだし、あなたがたを滅ぼしつくされるであろう。」イテル書の約束は、「イエス・キリストであるこの地の神に事えさえすれば」という条件だけである。私たちはイエス・キリストに仕え、イエスの教えに従って生活することを怠ることによって、もたらされる破滅に向かっているのではないであろうか。

アーノルド・J・トインビーは1948年に出版した著書「文明の試練」の中で、文明の発生と崩壊について述べているが、この言葉の意味を捕え、文明の衰退する理由を悟ったようである。トインビーは歴史と、歴史の繰返す型を定義した後、このように述べている。

「我々の現在の社会は実にあわれむべき状態である。我々の知識に照らして歴史をながめてみると、西欧が属している人間社会を生み出すにあたり現時点で約20回歴史が繰返し、我々の社会は例外となる可能性があるが、これら文明と呼ばれる社会様式はすべてすでにすたれているか消滅しかかっていることがわかる。さらに、これらのすたれた文明や消滅しかかっている文明の歴史を詳しく研究し、互いに比較してみると、文明の衰弱、衰退、崩壊の過程に循環形態と見られる指標を見出すことができる。当然のことながら、今日の歴史は同じように繰返すかどうかという疑問が湧いてくる。運命として我々にもたらされる衰退と崩壊は、いかなる文明も避けることができないのであろうか。」

トインビーはさらに以前の成功または失敗の型は必ずしも繰返されないという意見を述べている。

「我々は人間として、この選択の自由を与えられている。我々は神や自然の肩に我々の責任を押しつけることはできない。我々は自分で背負わなければならない。それは我々の責任である。」さらに彼は政治、経済、宗教の各分野で私たちが救われるためになすべきことを提案している。「3つの仕事のうち宗教上の課題はもちろん長期にわたるものであるが、同時に最も大切なものである。」(ニューヨーク、オックスフォード大学出版、P. 38-40)

「きょう、
選びなさい」

もし私たちが霊的に健全であって、イエス・キリストの教えに従って生活しているならば、私たちは個人として国家として生存するためにキリストに仕えなければならないのであるが、政治と経済上の問題はすでに解決されている。なぜならば、十戒や神の地の教えに従って生活することにより、私たちは平和と繁栄を得て生活することができるからである。これらの教えを検討してみると、もしその教えに従って生活するならば、あらゆる点で善と幸福に向かわせないものは何一つないことがわかる。

私たちはソドムとゴモラの崩壊を知っている。ソドムはエホバの園の中央にある第一の町であった。またツロとシドンの崩壊を知っている。ツロは大きな富と美に恵まれた都市で、救い主が訪れたと知られている最大の都市であったと思われる。エルサレム、および神より離れ、邪悪と姦淫を行なったため崩壊したその他の大都市と文明を知っている。私はこれが私たちの地にも急速にやってくるのではないかと恐れている。

ルドヤード・キプリングの予言的な詩「古より知られたる我らの父祖の神」は強大な大英帝国が栄華を極めていた時に、その国に与えられた警告の言葉であった。そしてこれはあらゆる国に対する警告でもある。

「古より知られたる我らの父祖の神、
広き戦場の主、
聖の恐しき手の下にて
我らはしゅろや松を支配す
万軍の主なる神よ、
我らが汝を忘れぬ限り、
我らと共にとどまりたまえ。」

混乱と叫びは絶え、
將と王は離る。
汝の古の犠牲は立てり、
へりくだりたる心にて。
万軍の主なる神よ、
我らが汝を忘れぬ限り
我らと共にとどまりたまえ。

我らが海軍は消えうせ、
砂丘と岬は火に沈む。
見よ、昨日のあらゆる栄華、
我ニネベとツロと共にあり。
国々の判士よ、
我らが汝を忘れぬ限り、
我らを助けたまえ。」
末日聖徒讃美歌76番（英文）

これは謙遜の中に強さがあり、おごりの中に弱さがあることを強調している。私たちは悔い改めて道を変えない限り、ソドムとゴモラの歴史を繰返すであろう。私たちのなしたことを分析して、私たちの価値がどこにあるのか探してみようではないか。私たちは科学の分野において非常に進歩をとげた。私たちは人を月へ往復させ、原子爆弾を作り、戦争の方法を非常に進歩させた。だが平和に関しては何をなしたであろうか。人間関係においては何をなしたであろうか。霊的にはどれほど進歩したであろうか。

ほとんどあらゆる新聞、雑誌、ラジオ、テレビから神のあらゆる律法が破られていること、すなわち盗み、怨恨、略奪、殺人、姦淫、暴行、死、飲酒による不幸などを見、聞きするにつけ、私たちも邪悪と姦淫の世界に住んでおり、神に仕えるのを怠っており、また確かに破滅に向かって進んでいるのである。日曜日に教会は空になり、店や公園、ハイウェイには人があふれている。これらに気づかない人がいるのであろうか。キリスト教徒と名乗る非常に多くの人々がこれらの罪を犯しているのである。

ある人はこのように言っている。「もし、私たちがキリスト教徒であるということで逮捕されることがあっても、私たちがキリスト教徒とする十分な証拠があるかどうか疑問である。」私たちは警告を受けている。私たちは無知を申し立てることはできない。もし自分と家族と国を救うつもりであれば、私たちはペテロが教えたように、悔い改めてバプテスマを受け、道を変えて、主に心に向けて仕え、主の戒めを守らなければならない。その責任は私たち個

人にかかっている。私たちには霊的な復興が必要である。

もしすべての人が福音の教えに従って生活し、神を愛し、神の戒めを守るとしたら、どんな素晴らしい世界に住むことになるのか想像できるであろうか。もしすべての人が互いに愛し合い、陰口、殺人、盗みがなく、すべての人が正直、真実、貞潔、慈善を行なうとしたらどうであろうか。戦争がなく、この地上に平和と天国がもたらされるであろう。現在戦争、法の施行、犯罪に使われている金銭が、貧しい人、病人、不幸な人に向けられるのを見るであろう。

主がアブラハムにソドムをその邪悪のゆえに滅ぼそうとしていることを話された時、アブラハムはもし50人の正しい人がいたらそれを延ばしてくれるように、そしてついに10人いたら延ばしてくれるように願った。主はそれを許された。しかし、10人の正しい人さえも見出すことができず、ソドムは滅ぼされた。私たちが正しい人の中に数えられて、そのため主が私たちの町と国を守られるようにしようではないか。主につかえるつもりか否かを決心することは非常に大切なことである。主はこのように言われている。「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ6:24)

正しく神に仕える方を選ぶということは必ずしも家庭、十分な金銭または収入、その他喜びと幸福をもたらすこの世の物を棄てるという意味ではない。この世につける物を追求しても神とイエス・キリストの教えから離れてはならないという意味である。

私は生涯を通じての経験から、主に仕え、主の戒めを守り、イエス・キリストと予言者たちにより教えられた福音の原則に従って生活するならば、物質的にも霊的にも人生に価値あるものについてそれが大きく成功をもたらすということをはっきり知った。私たちは主を拒み、主の教えを無視する者よりも、立派な家族を築き、大きく社会に貢献するであ

ろう。事実あなたがたも、知っている人々を見る時に、本当のキリスト教徒の生活を送っている人は幸福で、愛され、尊敬されて、永遠の生命への準備をしていることに気づくであろう。

主はこのようにも言われている。「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。」(マタイ6:19-21)

私は崩壊し、朽ち果てる宮や記念碑のような物質的な財産にあくことのない関心を寄せている人々を不思議に思う。先日私はリンカーン記念館の荒廃に関する記事を新聞で読んだ。これは国家を建設し奉仕した人々を尊敬している私たちすべてにとって驚くべきニュースであった。しかし、48年を経た記念館の荒廃した石灰石の壁と大理石の柱、モルタルがはげ落ちた建物、鐘乳石と石筍が変形して薄気味悪いほら穴と化した地下室、天井に群がっているおびただしい数のくもと小さなおよ、これらを見ていると、虫が食いさびがつく地上の宝の典型を見ているようである。人や場所の記念物に敬意を表わす時、私たちは同時に霊的な義務を果たし、時の経過に影響されない宝を積むことに力を注ぐようにしようではないか。

ヘンリー・バンダイクの書いた小説「大邸宅」を思い出すことができる。彼はこの小説で、地上で大邸宅に住んでいた金持ちの男が天国に行った時1つのつまらない帽子しか持っていなかったことに気づき大いに驚いたと書いている。しかし、貧しい男は自分のために天に宝をたくわえたため、天国で大邸宅を得て驚いた。

私たちは生涯、人生から何を得るかを決める選択をし続けている。私たちは自分の機会をより良い方向に利用しようとしているであろうか、それとも時間を労費しようとしているであろうか。私たちは善をなそうとしているであろうか、それとも悪をなそうとしているであろうか。私たちは教会へ集おうと

「きょう、
選りなさい」

しているであろうか。それとも安息日を汚そうとしているであろうか。私たちは神に仕えようとしているであろうか、それとも富に仕えようとしているであろうか。私たちはかね仕えることはできない。人生でその知恵を求めなければならない。

これは人が絶対的に悪であるとか、絶対的に善であるとかという意味ではなく、いついかなる時にもはっきりとした方向を持つべきであって、神を選ぶか、富を選ぶかということが人生における他の選択に大きな力となるという意味である。

神に仕え、神の戒めを守る者に神が約束された祝福を完全に受けるためには、両親が子供に神への信仰を教える必要がある。主はこのように警告しておられる。

「また、シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八歳の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。

また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むことを教えざるべからず。」(教義と聖約 68:25, 28)

そのような教育の重要性を理解している教会は、主に仕える備えを私たち自身と子供たちにさせるために、家庭の夕べを行ない、セミナー、インスティテュート、学校、大学、補助組織等に参加するよう勧めている。私たちはこの義務を延ばすべきではない。

私はBYUの同窓会会長アーネスト・L・ウィルキンソン博士がソルトレークにある末日聖徒病院の冠状動脈治療病棟に緊急の呼び出しを受けた時の話を聞いて非常な感銘を受けた。病院では、博士の長年の親友が重い冠状動脈血栓で危篤状態であった。ウィルソン博士は次のように語った。

「私がベッドに近づくと、友人は私の手を握り、酸素マスクの中から、苦痛で身をよじり苦しそうに息をしながらも、このようにささやきました。『ああ先生。私を助けられますか。私には延ばしていたことやしたいことがたくさんあります。』

私たちは近代医学の生み出したあらゆる電気医療

機械を通じて、その朝何時間もの間治療に努めました。そしてやがて友人が助かる見込みが次第にうすれていった時、私は友人の言葉が頭に浮んできました。私たちは考えているだけの者だろうか。それとも行なう者だろうか。どれだけ多くの人々が人生で大切な決定を延ばしているだろうか。私たちも生と死の岐路に立つ時、欠けている自分を見出すのではないだろうか。」

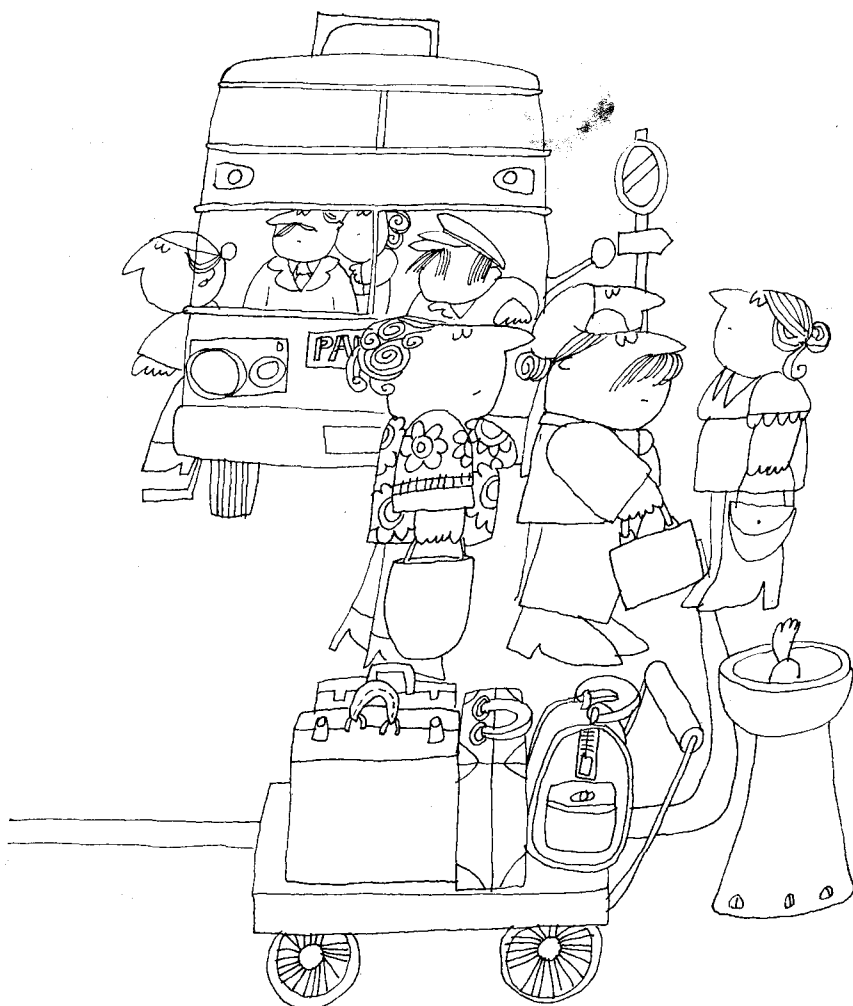
これは実に重大なさし迫った質問である。私たちはすべて生と死の岐路に近づきつつある。選択ができる私たちはどれほど幸運であろうか。自分の道を選び、自分の行く末を書き記し、自分の祝福を決めることができること知ることとはどれほどすばらしいことであろうか。まだ選択の時機を逸していない。選択するのは私たちである。だが、仕える者をきょう選ばなければならない。

私は、父なる神が私たちの御父であり、生きてましまし、私たちに従うよう望んでおられることを知って、毎日主に感謝している。父なる神は、「そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によってこの世が救われるためである。」(ヨハネ 3:16-17)

イエス・キリストは私たちのために命を与えられ私たちが完き生命を受け、救いを受けることのできる計画を与えられたのである。リチャード・L・エバンズはうわしく述べている。「天父は私たちを除外しようとする審判ではない。また私たちを打ち負かさそうとする競争者でもなく、私たちを有罪とする起訴者でもない。天父は愛にあふれた御父であって、私たちの幸福と永遠の進歩を望んでおられ、私たちが人生で天父を求めさえすれば、できる限りの助けを与えてくださる。」

私は私たちが自らを謙遜にし、救い主イエス・キリストを受け入れ、主に仕えて主が約束された祝福を享受するために勇氣と力を持つよう心から祈っている。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。



なかよし

ジュール

作：バーナディン・ビーティー

え：シェリー・トンプソン

ジュールは小さな声で話そうとするのですが、それでもかれの楽しそうな大きな声は、かれの住んでいるフランスの小さな村のはしからはしまでひびきわたります。

きょうのジュールの声は、いちだんと大きく、またたのしかったです。「ピエール／ピエール／ぼくはパリのイベットお婆さんのうちにあそびにゆくことになったよ。」と、かれのとなりに住んでいる、いちばんなかよしのともだちによびかけました。

いっしょにあそんでいたピエール、モーリス、ラウルがはしってきました。

「いついくの。」とラウルが、黒いひとみをかがやかせながらききました。

「あしたなんだ」と大きな声でジュールはこたえました。

ピエールはいやなかんじで頭をふりました。「町の人って、そっけないね。ぼくがパリにいたときは、話しかけてくれる人なんてだれもいなかったんだもの。」

「ともだちをつくるように、どりよくしたのかい。」ジュールはたずねました。

かたをすぼめながらピエールはいいました。「ていねいにたずねても、いそがしすぎてへんじもできない人たちと、いったいどうやってともだちになるんだい？」

「ジュール、しんばいしなくていいよ。とにかく、楽し

くすぐせるよ。」と、なぐさめるようにラウルがいました。

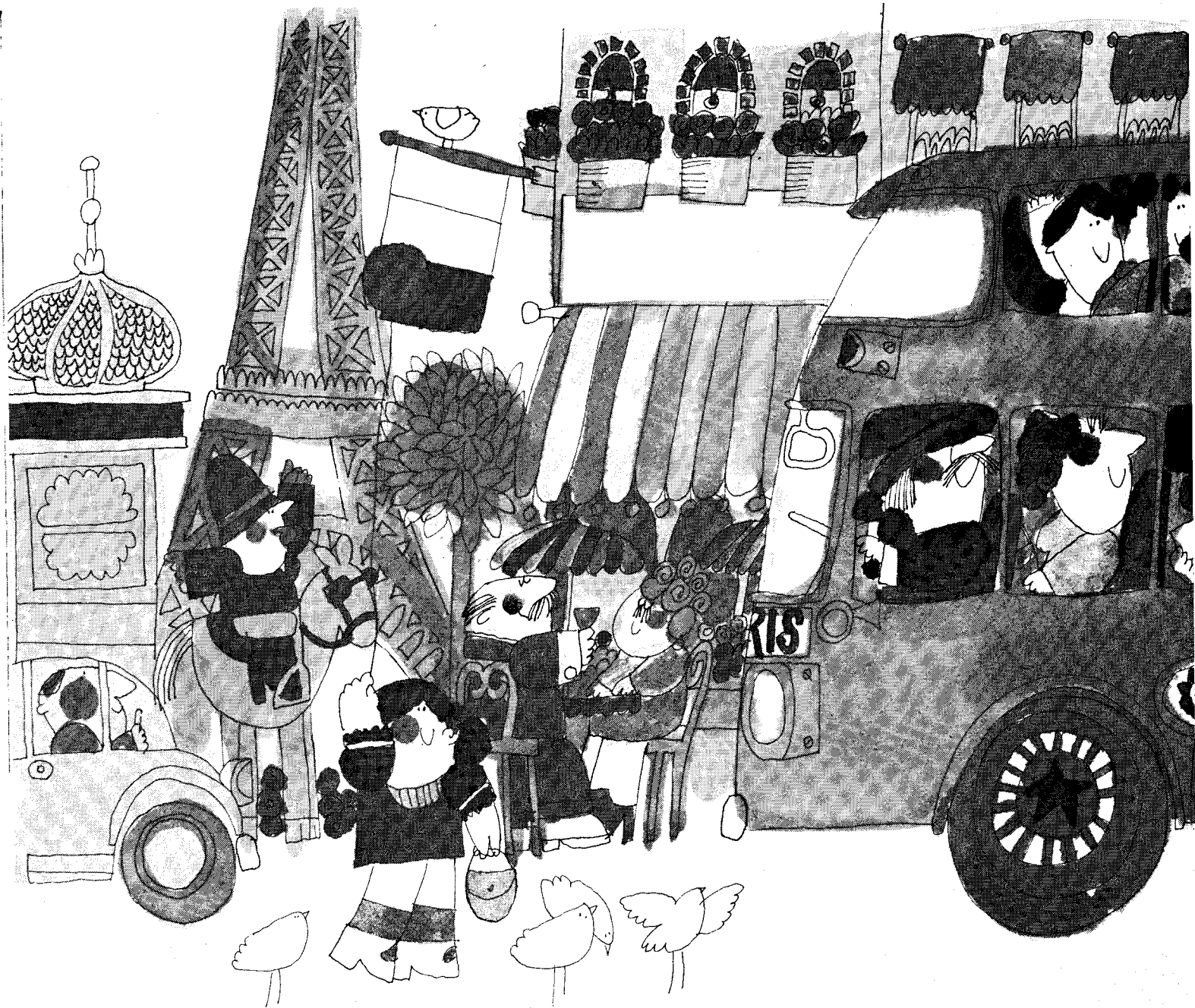
「そうだね。バスティーユの日には、すばらしいパレードが見られるよ。」と、ピエールもさんせいしました。

「それにさ、エッフェル塔や人形しばいもね。」と、モーリスがつけくわえていました。

「うん。」と、ジュールはこたえたものの、かれの声は、いつものような楽しそうな声ではありませんでした。しばらくしてから、かれはえがおになりました。たぶん、ピエールがなにかかんちがいをしているのだろう。パリのように大きな町の人たちみんなが、おあいそうだなってしんじられないな。

しかし、その次のあさ、パリゆきの大がたバスにのりこんだとき、ジュールはピエールのいったことをおもいだしました。ジュールに目をむけるひとはひとりもないし、話しかける人はだれもいませんでした。ジュールは、かた手にスーツケースを、もういっぽうの手には、イベットお婆さんにあげるしんせんやさいがいっぱいはいったふくろをぶらさげたまま、おどおどとっ立っていました。

「そこにおすわりなさい。」バスの運転手は、黒い服をみにつけていかめしい顔つきをした女の人のとなりにあいているせきをゆびさしました。「スーツケースは下において、ふくろはあみだなの上にのせなさい。」



「はい。どうもありがとう、おじさん。」ジュールの大きな声がバス中にひびきわたりました。

みんな顔をみあげて、あっけにとられていました。「こんにちわ、おばさん。」ジュールはできるだけしずかな声でとなりの人に話をしようとしたのですが、かれの声はひくいかねの音のようにひびきわたりました。

となりの女の人は、よそよそしくうなずきました。ジュールが自分のにもつを、せのびして頭の上のあみだなにおこうとしたちょうどそのとき、バスがガクンとゆれました。

「うわあー！」ジュールはさけびました。かれは頭からなすびやおいも、キャベツなどを雨のようにかぶり、ひっくりかえってしまいました。黒い服をみにつけた女の人はもういかめしい顔をしていませんでした。かのじょは心配そうに、「けがはなかったの？」と、ききました。

「はい、おばさん」とジュールは顔をあからめながらひび

くような大きな声でこたえました。「ぼくは、お父さんがつくったやさいをもってゆくようにいわれたけど、頭からかぶれとはいわなかったのに……。」

頭の上から落ちてきたねぎの束をよせ集めながら、かれはついにふきだしてしまいました。くすくすと笑う声がバスのうしろの方から聞こえてきました。するとこんどは、みんながとつぜんどっと笑いだしてしまいました。

「ぼくは、パリのイベットおばさんのところに遊びに行くついでに、これをもっていくところなのです。」とかれは、はんたいがわにすわっている黒い大きな口ひげをはやした男の人にいました。

「パリははじめてかい」と、男の人はにっこりと笑ってたずねました。「はい、そうです」と、ジュールのひとなつこい声がひびきました。

ジュールのうしろにすわっていた女の人は、キャベツをひ



ろってくれました。

「町ではこんなにみごとなキャベツはめったに見られませんが、かのじょはいいました。「どうぞとっておいて下さい、おばさん。」ジュールは大きなひびく声でいいました。するとほんとうにりっぱなキャベツだといったささやき声がバスの中にながれました。そうして、みんながまもなくいっしょに笑ったり、話しあったりするようになりました。

みんながひとりずつ、パリ中でいちばん自分たちの気に入っているところをおとずれるようにとジュールにすすめました。パリの町はずれにくると運転手までもが、しんせつになって笑ってさえくれました。

「わあ、すごいな。」ジュールはまるでどら声のような大きな声をあげました。かれは、おどろきのあまり目をみはりました。「大きな町だなあ。」

「ほうやの大きな声とあまりかわらないですよ」と、とな

りのせきにすわっていたドモン夫人がいました。ジュールは笑っていいました。「ぼくは、しずかに話そうとするのですが、ときどきわすれてしまうのです」「ほうやの声はたのしそうで、元気のいい声ですね。」と、ギヤロ夫人はジュールにもらったキャベツを手にながらいいました。「ほんとうにそうですね。」むかいがわのせきからシャベさんはうなずいてさんせいしました。「私たちを、みんなむかしからの友だちのような気分させてくれたね。」

ちょうどそのとき、バスは大きなえきのそばのていりゅうじょにとまりました。すると、とつぜんすべてのことが変わってしまいました。もう、だれにもこりとしなくなりました。自分のにもつをわしずかみにして、らんぼうに人を押しのけ、つきのけて出口の方へさっさと行ってしまいました。だれもさようならといいませんでした。

ジュールはたったひとりぼっちで、大きなバスにとりのこ

されてしまいました。かれはもちものを集めると、こみあうていりゅうじょにおりて行きました。そして、イベットおばさんをさがしました。かのじょはきていませんでした。ジュールは背すじがぞっとさむくなるのをおぼえました。かれはいそいでえきに入ってゆきました。そこもこんざつしていましたが、おばさんは見あたりませんでした。

ジュールはポケットに手をつこんで、お母さんがおばさんの電話ばんごうを書いてくれた1枚の紙きれをとりだしました。いそいで通りすぎようとしている男の人のうでにジュールは手をのばしました。男の人はへんな顔をしてジュールの手をふりはらい、いそいで行ってしまいました。ジュールはため息をつきました。ピエールのいうとおり、町の人たちはふしんせつでした。

ジュールは、荷車をおしている赤ぼうのところへゆきました。「ちょっとてつだってくださいませんか」と、ジュールはたのみました。かれの大きなひびきのある声はかべにあたり、駅のたかい円形のてんじょうにまでひびきました。「ぼくはイベットおばさんに電話をかけたいのですが」

「ジュール！」かれの右の方から声がしました。「ジュール！」とかれの左の方から、べつの声がしました。「かわいそうに」と、またほかの声がしました。

シャベさん、ドモンさんとギャロさんがいそいでかけてきたとき、ジュールの胸は喜びでいっぱいになりました。

「ジュールがあばさんをみつけるまでは、あなたがたのどちらかがいっしょにいてあげるのかと思っていたのに！」とシャベさんは2人をせめるような目つきをしました。

「私たちは、あなたがのこっていらっしゃると思っていたのよ」とギャロ夫人がいました。ドモン夫人はうなずきました。

「もう心配しないでね。ジュール、私たちがイベットおばさ

んをさがしてあげますからね。」

「はーら！」と、ジュールがうれしそうにさけびました。そして、うれしそうな身ぶりでジュールたちのほうへいそいでくる白いかみをした女の人をゆびさしました。

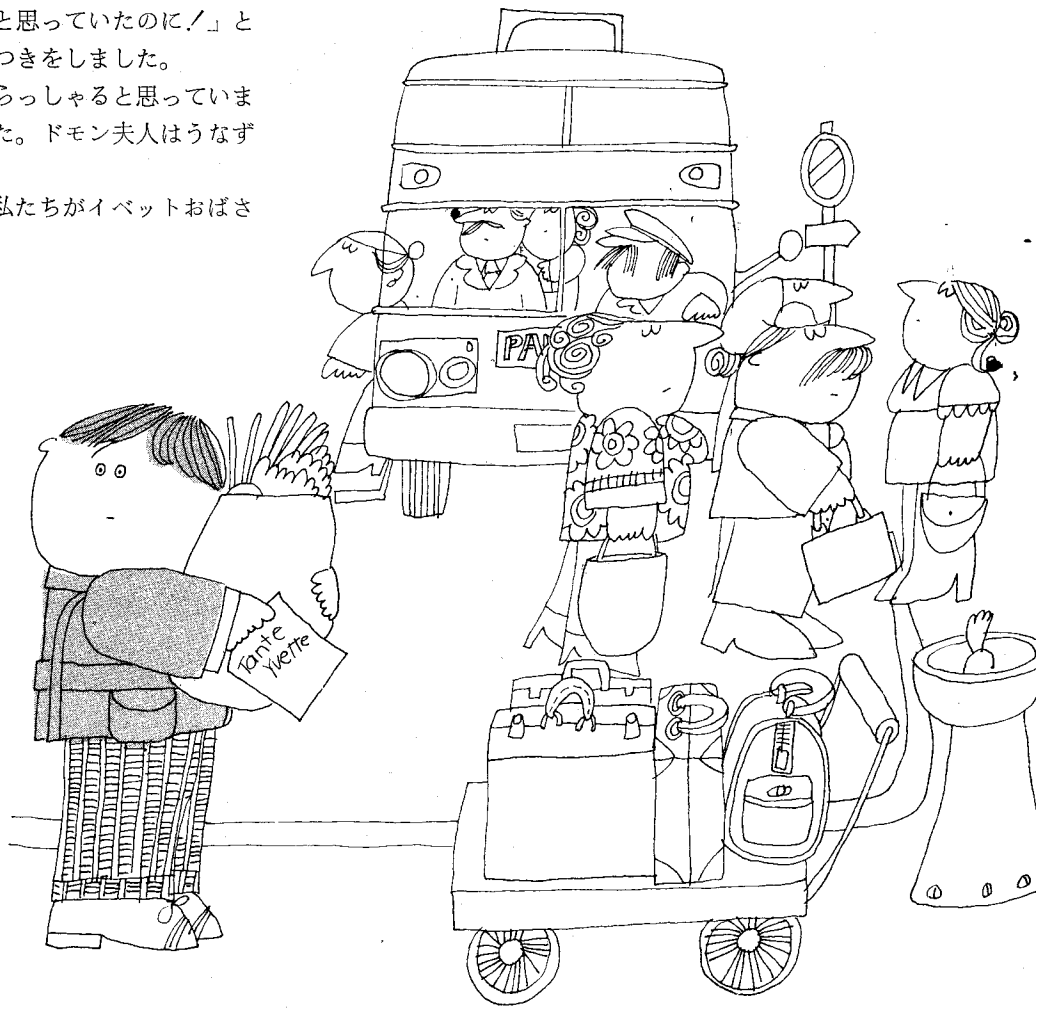
「イベットおばさんです」「道がこんでいてタクシーがうごけなくなったのよ」イベットおばさんは、いきもつかさずせつめいしました。

「むかえにでていなくてこわかった？」

「ええ、はじめのうちは」と、ジュールは大きな声でいいました。「でも、すぐそのあとバスにのっていたお友だちがもどってきて、たすけてくれましたから。」ジュールは、イベットおばさんに新しいお友だちをしょうかいしました。シャベさんはていねいに頭を下げました。「あしたのおひるごはんに、みなさんをごしょうたいしたいんですが」と、かれはいいました。「私たちは、このまちにこられるみしらぬお客さんをたすけるためにクラブをつくりましょう。」

「それはいい考えですね！」と、ドモン夫人はいいました。「そうね、そしてこのクラブを『なかよしジュール』となづけましょう」と、ギャロ夫人はいいました。

ジュールはただうなずくだけでした。かれはあまりのうれしさに、しばらく口がきけませんでした。今夜ピエールに手紙をかこう。そして、かれがまちがっているということを知らせよう。友だちは、どこにでもいるのだ！と。



過去、現在、未来からの声

十二使徒評議員会会長代理

スペンサー・W・キンボール

愛 する兄弟姉妹ならびに友人の皆さん、私はスミス大管長がただ今話されたことすべてに同意申し上げる。また私はスミス大管長が現在この世における神の予言者であることを証する。

歴史は繰り返す、そこで我々は現在また未来の問題を解決するためには過去のことを振り返って学ぶことこそ必要である。コリント人も我々が今の時代に耳にしているような矛盾した言葉によって惑わされていたようである。パウロはコリント人にこう言っている。

「また、もしラッパがはっきりした音を出さないなら、だれが戦闘の準備をするだろうか……。それでは空にむかって語っていることになる。世には多種多様の言葉があるだろうが、意味のないものは一つもない。」(Ⅰコリント14：8-10)

パウロの声は印象的な力にあふれた大きな声であった。そしてその声は中世の時代も決して沈黙することはなかった。

我々すべてを取り巻く声がある。その中にはきびしい声や耳ざわりな声、また快い声もあれば我々の心をつき刺すような声もある。

パウロの述べた言葉には、末日に関する示現が含まれている。その声はこう言っている。

「……後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに氣をとられて、信仰から離れ去るであろう。それは、良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のしわざである。これらの偽り者どもは、結婚を禁じたり、食物を断つことを命じたりする……」(Ⅰテモテ4：1-3)

再び声がある。「悪霊の教え」が耳ざわりな声で宣言している。罪などはない。悪もない。神などいない、と。そして大洪水など決して起こらないと信じていたノアの洪水以前の人々のように『食え、飲め、楽しめ』と言っている。

霊を堕落させようとする多くの声が、肉欲の楽しみを得よ奔放に肉体的満足を得よと語っている。現在の我々の世はニーフアイの予言者がいた時とほぼ似かよっている。ニーフアイ人の予言者は次のように述べている。「もしも……義人た

ちの祈りがなかったならば、お前たちはすでに全く滅ぼされていたことであろう……」(アルマ10：22)言うまでもなくすべての戒めに正しく忠実に従って生活し、その生活と祈りによって、この世を破壊から救っている人々も数多くいる。

我々は終りの時代に生きており、この時代は不安定な恐ろしい時代である。闇はその暗さを増し、暗黒が忍び寄ってきて我々をおおう。

パウロの響き渡る声が聞こえる。

「……終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、……神をそしめる者、親に逆らう者、……神聖を汚す者、無情な者、……無節制な者、……神よりも快楽を愛する者……となるであろう。」(Ⅱテモテ3：1-5)

ある著名な寄稿家は現代のことを次のように書いている。

「確かなことが一つある。我々には一世紀としてゆう長な苦しみのない衰退を許されることはないであろう。我々には今敵がある。その敵とは無情、粗雑、残虐である。また……自分たちは衰微した道徳よりも高い状態にあると信じている傲慢な人間であり、執ように敵対する相手をみつけようとする人間である。」(ジェンキン・ロイド・ジョーンズ、「人間の生み出す事件」1961年11月24日)

最近、道行く人々に「貞潔は古い考え方でしょうか」という質問がなされた。すると、その答えは次のようなものであった。「道徳の考え方が変わったんですよ。純潔はもうすたれたのです。愛があれば、そんなことは問題ではないでしょう。」「純潔な人なんて気味が悪いですね。」「貞淑な人なんて今頃ほとんどいないでしょう。」また1人の少女は言った。「純潔なんて古いわ。だってこの文明の世の中に人々はみんな自由になったんですよ。」

そう、罪を犯すのも律法を破るのも自由である。性病にかかるのも自由なら命を縮めるのも自由、神を否定するのも自由だし、すべての真の自由から離れてしまうことも自由である。

我々はこの世の中が深い堕落の道をたどっているのを目の

当りにしている。パウロが警告したすべての罪が今この社会にはびこっている。

男も女も「自分を愛する者」となっている。そして皆自分の成功を自慢している。また神をのろいそしている。また別の罪は子が親に従わず親が律法に従わないことである。多くの人々が人間本来の愛情をなくしてしまい、利己的な願望を満足させようとするために家族の生活をむしろんでいるように思われる。

人間の愛情を捨て、求婚期間や普通の結婚関係を無視してきた墮落者が何百万人もいるといわれている。そしてこの事実は草原の火のごとくに広がり、この世界を変えている。このような人々は神に対してもまた配偶者や子供に対してさえも「人間本来の愛情」に欠けた人間である。

パウロは、私たちがほとんど忘れてしまったかのような言葉、自制心について述べている。辞書の中には今なお、自制心とは克己心、特に性欲上の節制のことと示されている。多くの正しい人々もこの時代の大胆な気運に影響されて、妻あるいは夫のために手術を受けようとしている。こうしてこれらの人々は避妊し、子供の数を減らすようにというかん高い声に応じている。子供を生み育てるということは決して容易なことではない。しかし容易なことをしていたのでは成長も進歩もない。にもかかわらず、今日、「子供を少なく」という大きななりたてるような叫びがあり、また避妊薬や手術をしてさらにひどい墮胎によってこのことがなされている。まったく、世界の人口の減少を図る提唱者は自制心のかけらも持っていないように思われる。

本屋には不道德な写真の載った本が並び人々の情欲を満足させようとしているが、自制心の見受けられる本はほとんどない。人間は、「人生はセックスのためにある」という説をもって、「性的満足」を得ようとする方法を編み出している。そしてそのために家族や家庭や永遠の生命、その他のすべてのものをも犠牲にする。肉欲から離れ、清い聖なるものにその心をとどめるように人に勧める、新聞、教壇あるいは説教台からの重々しい響き渡る声がなければならない。

パウロは自制心と克己について教え、伝道中ずっとこのことを実践した。パウロが次のように述べた時、それはこのことについて語ったのではないだろうか。

「わたしとしては、みんなの者がわたし自身のようにしてほしい。……もしわたしのようにしていれば、かれらのためによい。」(欽定訳Ⅰコリント7:7-8)

「すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである……」(Ⅰコリント9:27)

パウロは「神よりも快樂を愛する者」ととりたてて述べている。この言葉は、我々の時代の放逸なセックスの自由について語っていないだろうか。

パウロは「……人の家にもぐり込み、そして、さまざまの欲に心を奪われて、多くの罪を積み重ねている愚かな女どもを、とりこにしている者がある。」(Ⅱテモテ3:6)

不道徳は今やかつて尊敬されていた人々によってさえ黙認されているように思われる。放とうからは決していかなる良きものも生まれえない。パウロは言っている。

「これに反して、みだらな生活をしているやもめは、生けるしかばねにすぎない。」(Ⅰテモテ5:6) また天からの声はこう言っている。「汝ら姦淫することなかれ。姦淫をなして悔い改めざる者は捨てらるべし。」(教義と聖約42:24)

大きな耳ざわりな声が、教育者、実業家、社会学者、心理学者、作家、映画俳優、国会議員、裁判官等、あるいは牧師の間からさえも聞こえてくる。それは彼らがわずかばかり学んですべてのことを知っていると思い込んだためである。

この利己主義と高慢さは、狡猾な偽りの父によって吹き込まれている。「悪魔の狡猾な謀ごと」(Ⅱニーファイ9:28)について述べているニーファイ人の予言者の声を聞いてみよう。

「……人間がもしも神の訓戒に従うならば、学問のあるのも善いことである。」(ニーファイ9:29)

「……人間は学問があると自分は賢いと思って……自分独りで解ると思って……その智慧は愚かであって……かれらはずいに亡びるのである。」(Ⅱニーファイ9:28)

ペテロは確信に満ちた声で、悪を行なう者を不義の報いとして罰を受ける分別のない動物と呼んだ。さらに、「……だましごとにふけっている……しみであり、きずである」「その目は淫行を追い」「心の定まらない者を誘惑し」と彼らのことを語っている。また彼らの「肉欲と色情」について語り清められてから罪に立ち帰る者は、犬が自分の吐いた物に帰り、豚が洗われてもまたどろの中にくっついていくようなものであると言っている。(Ⅱペテロ2:13-22参照)

ペテロを支持する声は、パウロからテトスへの手紙の中に示されている。

「きよい人には、すべてのものがきよい。しかし、汚れている不信仰な人には、きよいものは一つもなく、その知性も良心も汚れてしまっている。彼らは神を知っていると、口では言うが、行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者、また不従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である。」(テトス1:15-16)

若者たちの欲求不満について多くのことが言われてきた。私たちは彼らの常軌を逸した行動や不従順、明らかな信仰の欠如を正当化するなどということではできないが、若者たちが欲求不満に陥いることの責任の一端は、おそらく政府や神の律法に従わない両親の悪い模範にあるといえるであろう。

確かに教壇や編集室、放送局、また説教壇からの声さえも若者の欲求不満に対して何がしかの責任があるということが、できる。

そのような声は、彼らの永久に残る偽りや、悪と戦う時に真実の指導を与えるのを怠ったことに対して、「……その民も祭司もひとしく……」（イザヤ24：2）責任を取らなければならない。「祭司」という言葉は、ここではいかなる信仰を持っていようともその宗教の指導者すべてを意味している。イザヤは言っている。「地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき、儀式を変え、とこしえの契約を破ったからだ。」（欽定訳イザヤ24：5）

その耳ざわりな声の中に、人々の汚れを促し、人々が墮落していく傾向を黙認し、また神の全知を否定する多くの聖職者の声があることに、我々は驚かされる。これらの人々が信仰を固く守るべきであることは明らかであるが、しかし中には世の騒々しい叫びに屈してしまっている者もいるのである。

ここで私は新聞から幾つか引用してみたいと思う。「多くの聖職者はマリファナについて是か非かの解答を出すことをしぶっている。」「マリファナに対する是非の答えは状況によるのである。」（タイム、1968年8月6日）

このようにして彼らはすべての罪を闇に葬ってしまう「情況の倫理」を作り出してきた。

ほかの宗教指導者たちはこう述べている。

「……キリスト教徒の行いに関する偉大な律法は、性の問題に必ずしも当てはめる必要はない。」（ロンドン—英国教会評議会）

次にこれと対照的な予言者の力強い声を聞いてみよう。ペテロは次のように予言している。

「しかし、民の間に、にせ予言者が起ったことがあるが、それと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、……また、大ぜいの人が彼らの放縦を見習い、……」（Ⅱペテロ2：1—2）

ちょうど今月の新聞に、多くの会員を持つある教会の退職した指導者が、「教会の祝福によって、結婚していない男女が床を共にすることを認める旧来の婚約の復興」を提唱し、さらに「それは道徳的な意味においては姦淫とはみなされな

い」と述べたことについて書かれていた。

また次のような評論家の声もある。「最近、映画界は、今後性欲倒錯や同性愛がもはや映画からしめ出されることはなくなるだろうと述べた。……我々は日常生活に通じている暴力や不信、サディズムの中に若者たちを浸しているのである……」（J・L・ジョーンズ）

ごく最近の出版物から引用してみよう。

「ある教会の協議会は今日では互いに同意した者同志の同性愛はもはや犯罪ではないという考えを承認している……」

多くの読者を持つある雑誌は次のようなことを述べている。「サンフランシスコのある聖職者たちのグループは、教会は同性愛に対する批評を取下げべきであると考えている……」

牧師とその妻からなるあるグループが、男女の同性愛を提唱する者たちによって催された、性欲倒錯の計画の資金集めのためのパーティーに出席した、ということが報道された。その雑誌から引用してみよう。

「もし学校組織の中で現在働いている同性愛提唱者たちがすべて明らかにされ、州法を維持するために免職されるならば、港湾地区のすべての学校は、ただちに閉鎖されなければならない。」（ニューズウィーク、1967年2月13日）

前述の牧師は次のように述べたと報道されている。「……同性の2人の人間も愛を語り、性交によって愛を深めることができる。」（同上）

これらは醜悪な声であり、大きくて耳ざわりな声である。

なぜ我々はこのようなことがらを話すのであろうか。なぜ我々はもっと楽しい話題があるというのに、悔改めを叫ばなければならないのであろうか。それは、世の人々の生き方が変わらなければ、だれかが世に向かって世の滅亡について警告しなければならないからである。

ここでポープ¹の詩を思い出すことができる。

悪、一目見し時憎しみの念湧く如き、

いと恐ろしき顔つきの魔もの。

否、幾度か見し毎にその顔つきに慣れ、

耐える気持ちがあわれみに、

あわれみの情は悪しきを入るものとなる。

（アレキサンダー・ポープ「エッセイ・オン・マン」作品第Ⅱ、第135）

このような警告の声に対して激しく反対する声があるに違いない。我々こそは声を大にして警告の声を発すべきである。

偉大なモーセにとって、これら性欲倒錯者たちは汚れた忌み嫌わしく、死に価する者たちであった。パウロにとっては

彼らは不自然で卑きように罪深い、そして恥辱的な情欲をもつ者であって、王国へのすべての門から閉め出されてしまう者たちであった。

両親が性に関する行動において無節操である場合、あるいは執筆家や作家、宗教界の指導者やその他の人々がこのような罪を黙認する時、模範や自分をつなぎとめる場所、信ずることのできる正しいもの、安全な港を探し求めて迷い、欲求不満に陥っている若者たちを我々はいかにして暗闇から救い出すことができるであろうか。

「性の混乱を黙認する人々は、それに陥っていない人々すらも危険にさらしているのである」と、社会学者ソロキンは語っている。

ある有名人が、高い尖塔のついた建物はたくさんあるがその中では「罪」という言葉が長い間語られず、それに反対する説教が一度もなされなかったと叫んでいる。

それらの声とまさに対照的に、高いところから主の教会の権威ある者の声が聞こえてくる。

「……人は生物学上の一単位であり動物である。しかし人はまたそれ以上のものである。人は不死不滅の霊の宮である。その霊は肉体によって汚されることがある。汚辱は貞節の律法が破られた時に起こる。」と J・ルーベン・クラーク Jr. 副管長は言っている。

「私たちの文明そのものが貞潔と結婚の神聖さと聖なる家庭に基づいている。これらを破壊する時、キリスト教徒である人は非人間と化すのである。

……家族の関係は永遠に続くものである。そしてそれは、私たちの知っている中で最も荘厳で、最も神聖な人間の関係である。」(大会報告1938年10月, P. 137)

末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長会は次のようにはっきりと警告している。

「……性的な罪、すなわち男と女の誤った性的関係は殺人に次ぐ大罪である。主は姦通、姦淫、売春の間に何らの根本的な区別をなさなかった。いずれも主のおごそかな厳しい非難を受けるものであり……(決して)……主がこの罪に対して宣告された罰と裁きとを逃がれることのできないものである。裁きの日は、夜の次に朝が来るように確かにやって来る。」

そして出版物や放送から、あるいは説教壇から悪を黙認し正当化する者たちに対してその声はさらに続く。

「この犯罪をいづくろい、そのような情欲にふけることを食欲や渇きを満たすのと同じように自然の欲求を満たす罪のない満足だと言う者たちは、唇をもって汚れたことを話し

ているのである。そのような者たちの忠告は破壊を招き、その知恵は偽りの父から来たものである。」(大管長会のメッセージ, インブルームメント・エラ, 1942年11月号, P. 686)

再びパウロの響きわたる声が聞こえる。

「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」(I コリント 3: 16-17)

そして神の声は語る。「われはイエス・キリストなり……われ汝に再び命ず。汝の隣人の妻を貪り、また隣人の生命を取らんとすることなかれ。」(教義と聖約 19: 24-25)

結婚しないで性的な関係に陥れば神殿への戸口に錠をおろすことになり、その結果永遠の生命に到る道をとぎすことになる。

我々は聞いておられる方々すべてを、水潤う庭、影ある心地よい木々のもと、また不変の真理のもとへ心から招きたいと思う。

我々と共に確信と安寧と一致に來られたい。ここには冷たい水が流れており、その泉は涸れることがない。

来て予言者の声に耳を傾け、神のみ言葉を聞こうではないか。

主は不変のお方である。きのうも、きょうも、いつまでも変わることのないお方である。従って主の教会はゆるぎなく変わらずに立っている。罪は黙認されない。しかし心から悔改めるならば許される。

我々のために苦しみを受けられた主は次のように言っておられる。

「……われ汝に命ず、悔い改めよ……汝の痛苦甚しからざらんがために悔い改めよ。すなわちその痛苦の如何に甚しきかを汝知らず、その如何に強烈なるかを汝知らず、また如何に堪え難きかを汝知らざるなり。見よ、われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり。されど、人もし悔い改めずば誠にわれと同じ苦しみを受けざるべからず。その苦しむたるや、われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ……」(教義と聖約 19: 15-18)

主の僕らの声があまねく響き渡るよう、イエス・キリストのみ名によって祈りたまつる。アーメン。



自制は靈的生活に欠くこと
ができない

十二使徒評議員会補助
エルレイ・L・クリスチャンセン

怒るにおそかれ

兄弟姉妹の皆さん、私はちょうど今（マリオン・G）ロムニー長老が語られたすべてのこと、またけさの大会で我々の予言者が述べられたこと、および予言者に続いて永遠の福音の真理を述べた方々の言葉に全く共感している。

「私は今、我々ひとりひとりにかかる事柄について少しの間話したいと思っている。これはありふれた問題であるが、注目に値するものである。

「怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。」（箴言16：32）とソロモンが語った時、ソロモンは自制なくして個人の靈的成長は得られないことを知っていた。

またある人は次のように言った、「人の値の大きさは、彼が怒るものの大きさに測ることができる」と。何と真理を言いあてていることだろう。ささいなことで動転したり怒ったりすることは、その人が子供っぽく、成長していない証拠である。

他の人と交わる時、またひとりである時でさえ、我々は絶えずいらだちの中にさらされている。そして、どのようにこのいらだちに反応するかによって、人格や性質が写し出されるのである。健全で明るい性格を伸ばし、人の助けとなり、よい影響を与える者になるために、人はすぐに怒りを表わすことを避けねばならないということは道理にかなっているように思える。これによって、我々はおとなであるということを示すことができるだけでなく、複雑な事態を賢明に解決できるであろう。

なぜなら、人は怒っている時に立派な成果をあげることはめったにないからである。怒りはよい結果をもたらさない。怒りは破壊者であって、建設者ではない。

節度のない怒りは、我々の身体や精神に対して消極的にしる悪い影響を及ぼすばかりでなく、同時に知恵や正しい判断までも破壊してしまう。また、我々が動転する時理性を追いやって怒りが支配するようになる。それゆえ怒り狂った嵐の中を出航させる船長が愚かではかかげているように、怒っている時、決定を下すのは愚かではかかげている。怒りからは損害と破壊しか得られないのである。

怒りが支配する時、正しい判断は消え去る。現に、沈着な人は、怒っている人より明らかに有利な立場にある。私は次のような記事をどこかで読んだことがある。「人は正しい時かんしゃくを起こす必要がなく、誤っている時人は怒り出さざるを得ない。」

日常生活において、我々は怒りを押さえようとしなない人をよく見かける。

スペンサー・W・キンボール長老は、彼のすばらしい著書「許しの奇跡」の中で次のように述べている。怒りは「邪悪な思いであって、制御しなければ、いまわしく横暴な行動の先がけとなるかもしれない。」

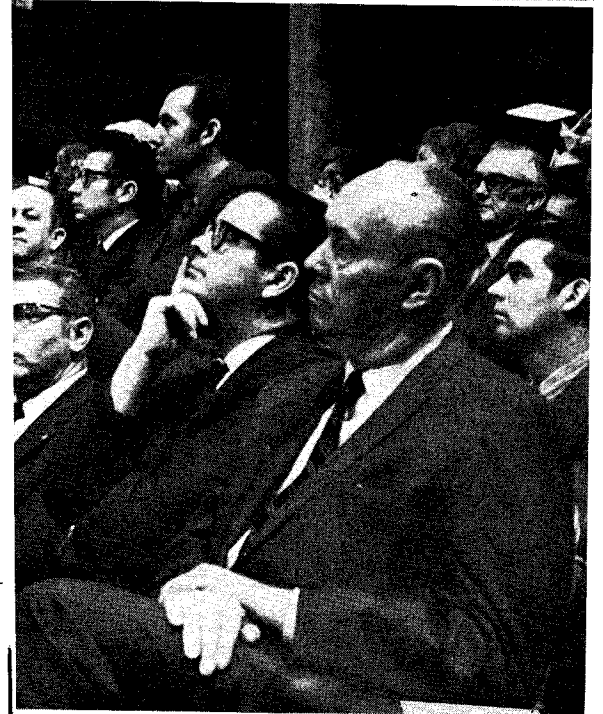
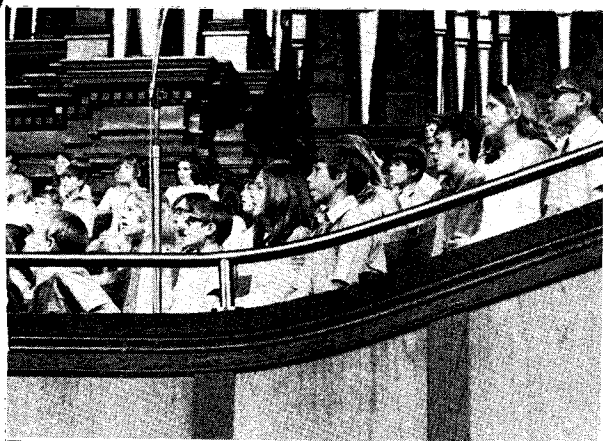
物事に対して怒ることは実にばかげたことである。

レンチがすべて、手にあざができたからといっても、それは小麦畑の途中でレンチを投げずる理由とはならないし、混雑

した通りでタイヤがパンクしたからといって、いくらわめきちらしても元通りにはならないであろう。

物事に対して怒るのははなはだ愚かなことであるが、人に向かって怒り、激情を抱き皮肉な言葉を語る時それは悲劇を生み出す要因となるのである。たとえば、自己本位のドライバーが、ある車の前に接近してわり込んだとする。その時、気分を害されたドライバーがスピードをおとさず、怒って接触するほどその車に近づけたとする。またあるいはしかえしをするため何か他のことをしたとする。その時、まさに惨事が起ころうとしているのである。

我々の家族の中でさえ、腹立たしい事態が起こることがある。そのような時にこそ両親は落ち着いて模範とならなければならない。感情を抑えることのできない人は、訓練のできてない子供のようなものである。そのような子供は、すねたり、かんしゃくを起こして感情を表現し、周囲の人の気持ちを顧みない。家庭においては怒りが抑えられ、愛が満ちていなければならない。非常に感じやすい時期に子供が自制のない怒りから起こった醜い事態を体験する時、父親と母親の間でかわされる冷たい言葉を聞く時、また言い争いが思いやりのある雰囲気と相互の尊敬の気持ちを押しつぶすのを見る時、すなわちこのような状態が子供の環境にある時、いったいその子は清くなり、気高く成長するどのような機会に恵まれているといえるのだろうか。子供の心は、写真屋の鋭敏な感光板のようなものである。す



なわち、子供の心はよいこと、悪いこと、あらゆる出来事を記録する。子供は言われたことは忘れるかもしれないが、心に感じたことは決して忘れないのである。

我々の耳に、ブリガム・ヤング大管長の言葉が聞こえてくる。このことに関して、彼は、妻や子に代って、夫や父親に次のように述べた。「怒ったり、むっつりしたりするのを止めよ……祈りができぬほど腹を立てるのを止めよ……」（ブリガム・ヤング 説教集 P. 268—269）

私はまた彼が次のように語ったのを、何かで読んだことがある。もし一緒に祈りたいと思わなければそうしたいと感じるまでひざまずいて祈りなさい。私はそれが適切な勧告であると信じている。

（説教集 P. 46参照）

数年前、デビッド・O・マッケイ大管長は父親と母親に次のように訴えた。「子供の前に正しくない見本を決して見せてはいけない……子供に不機嫌な言葉を決して聞かせてはいけない。自分自身を制すべきである。人は何をしようとも……すぐにかんしゃくを起こす弱い存在だからである……」

（インプルーヴメント・エラ1964年12月号, P. 1082）

心の葛藤は進歩する手段となることがある。なぜならば、その心の葛藤に十分に打ち勝つことにより私たちは成長し、キリストのようになることができるからである。

ほとんどの激しい感情と同じように、怒りは正義の表明にも、不義の表明にもなり得る。義の怒りは神の特質であり、その怒りは邪悪に対して永遠に燃え上がる。

同様に、靈感を受けた人は、主によって十戒がきざまれていた板をモーセが割った時のように、義の怒りをもって語り、行動するよ

うに導きを受けることがある。

しかし、欲求が満たされない時、かんしゃくを起こし、怒りを爆発させ、醜く、恨み深く、憎しみ深くなるのは許されないことである。

怒りを爆発させたり、執念深くなるのはなぜ許されないのであろうか。それはただ我々にそのような性向を抑え、克服する力が与えられているからである。そのような傾向を抑えられなければ、我々は他の人々の尊敬や愛をもたちまち失ってしまうであろう。

イエスは、不当に告訴され、あざけりの的とされたにもかかわらず、当惑しているポンテオ・ピラトの前に堂々と落ち着き払って立たれ、怒りに関してその行動の中で模範を示されたのである。イエスは怒って報復などされなかった。むしろ、イエスはどっしりと落ち着き、確固としておられたのである。イエスのふるまいはまさに神を思わせるものであった。我々すべてにとって、これ以上模範となる態度があるだろうか。

偉大な教師である救い主のすばらしい言葉を聞いてみよう。

『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。あなたがたの敵を愛し、のろう者を祝福し、憎む者に善をなし、さげすむ者、迫害する者のために祈れ。』（欽定訳マタイ5:43—44）

私はこれが実行するにたやすくはないということを確認するが、兄弟姉妹の皆さん、もし我々がこの世での目的を達成することを望んでいるならば、心からこの愛を実践するように努力しなければならない。

もしこのようにするなら、我々は個人的に大いなる祝福を受け、我々の家庭は愛と調和と平和に満ちた穏やかな雰囲気をかもしだすであろう。私はこのことを証し、これを実現しようとする時に主の導きがあるよう、主イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。



足なえ、身よりのない者、
罪人に対する私たちの責務
を考える

トーマス・S・モンソン
十二使徒評議員

迷える大軍

昨年の11月、私はフランスの中部地方を
通ってゆるやかに流れるソム川
にかけられた非常に古い橋の上に立った。
私は1918年の休戦、そして大戦争の終了を
告げる歌声が流れたあの時から53年という
月日が過ぎ去っていたことにふと気がつい
た。私は53年前のソム川の様子を思い浮
かべようとした。一体何千人の兵士たちが
この橋を渡ったことだろう。ある者は生き
ながらえてこの橋を渡り帰還した。しかし、
その他の人々にとって、このソム川は帰
らざる川となったのである。戦場となった
ヴィミー・リージュ、アルマンチエール、
ヌーブ・シャペウルではぞっとする程た
くさんの命が奪われたのである。立ち並ぶ
均整のとれた白い十字架は決して忘れるこ
とのできない記念碑の役割を果たしてい
る。

私は思わず、「戦争は残虐なものだが、
しかしそれでも愛に基づいた勇気ある行動
に向かわせるとは何と不思議なことであろ
う」とひとり言を言っている自分に気が付
いたのである。

少年の頃、私は「迷える大軍」という記
事を読むのが好きだった。「迷える大軍」
とは第一次世界大戦の時の第77歩兵部隊の
一団のことである。ミューズ・アルゴを
攻撃している間、ある陸軍少佐は敵軍が掘
ったざんごうの中をぬってこの部隊を指揮
した。しかし、隊の両側にいた部隊は前進
することができなかったため、その部隊は
敵軍に包囲された。食料と水が欠乏し、負
傷兵たちは撤退することもできなかった。

後方では攻撃がくり返えされた。敵軍が降
参するように求めているのを無視したので
あった。新聞はその部隊のねばり強さを報
じた。見識ある人々はそのまま戦いが進ん
だらその部隊の破滅を招くと考えていた。
全部隊間の交通がしゃ断されていた短くも
絶望的な時期が過ぎると、第77師団以外の
他の部隊が進軍し、「迷える大軍」を救い
出した。従軍記者たちはその至急報に救出
部隊はまるで戦友を救い出すために出かけ
た愛の十字軍さながらに努力していると書
き送ったのである。人々はすすんで義勇兵
となり、勇ましく戦って、死んで行った。
これにふさわしい称賛の辞は、オリーブ山
上で述べられた不朽の垂訓の中の言葉があ
てはまる。それはすなわち「人がその友の
ために自分の命を捨てること、これよりも
大きな愛はない。」(ヨハネ15:13)である。

忘れられていることは「迷える大軍」の
苦境についてであり、忘れられたことはこ
の大軍を救うために払われた多くの代償に
ついてである。ここで過去からもどって現
在について考えてみよう。今日、「迷える
大軍」がいるだろうか。もしあれば、迷え
る大軍を救うために我々に課せられた責任
はどのようなものであろうか。このような
人々はカーキ色の軍服を着ていないだろ
うし、また太鼓の音に合わせて行進もしな
いであろう。しかし、このような人々は孤
立によってもたらされる同様の恐れを抱き
絶望を感じ、迷いを知っているのである。

世の中には手足がきかない、言葉が話せ
ない、目が見えないといった肉体に欠陥の

ある「迷える大軍」がいる。あなたがたは
盲導犬を連れとしてその後からびったりと
ついて歩く人、または白いつえを頼りに、
コソコソと足元を確かめながら歩む人をど
のようにして助けたらよいか、そのなすす
べを知らずに、心に葛藤を生じた経験はな
いだろうか。この人跡未踏の暗黒の荒野で
迷っている人々はたくさんいるのである。

「迷える大軍」を救う救済事業を知りた
ければ、盲人を収容している施設を訪問し
目の見えない人々のために本を読んであげ
ている人たちの無私無欲の奉仕を見なさい。
そして不具な人々を教えるその技術を
観察しなさい。また彼らにも仕事を与えら
れるように努力している人々の精神を感じ
取りなさい。

悲惨にもそのような不具になった人々の
ために、喜んで働き惜しみなく与える人々
は、自分たちが目の見えない人々の人生に
もたらす光の中に十分な報酬を見つけてい
るのである。

私たちは、盲人の敏しような指先が点字
版の新約聖書のページをすばやくめくる
時、その盲人の喜びを感じるであろうか。
盲人はヨハネによる福音書第12章でとまり、
平和の君によってもたらされた約束の
言葉の深い意味を考えている。それは「わたし
は光としてこの世に来た。それは、わたし
を信じる者が、やみのうちにとどまらない
ようになるためである」(ヨハネ12:46)
という聖句である。

老人、未亡人、病人という「迷える大
軍」のことをよく考えなさい。このような

人々が孤独というかわき切ったさびれた荒野に住んでいる姿を我々はひんぱんに目にしている。若さが失ったり、健康をそこなったり、また気力が衰えたり、かすかな希望の光さえもがぼんやりと消えかかったりしている時、おびただしい数にのぼるこのような「迷える大軍」に及ぼされる救いの手と同情心は彼らを助けさえることができるのである。

現在ニューヨーク州のブルックリンの教会支部に属するある青年が13歳の時にソルトレーク市に住むそのような人々に救いの手を伸べたことがあった。この少年とその仲間たちは、たくさんの貧しい年老いた未亡人たちの住んでいる所に住んでいた。少年たちはすばらしいクリスマスパーティを開くために1年間をかけて貯金し、計画をたててきた。クリスマスとは他の人のことを考えることであるというクリスマスの精神に目覚めるまで、少年たちは自分たちのことばかり考えていたのである。少年たちのリーダーであるフランクは、今までためてきたクリスマス資金を自分たちのために計画していたパーティに使わないで、むしろ近所に一緒に住んでいる3人の年老いた未亡人たちのために使おうと提案した。

新しい試みに胸をおどらせながら、少年たちは特大のローストチキンやポテト、野菜、ツルコケモモ、それに伝統的なクリスマスの祝いに必要なものはすべて買った。少年たちは宝物の贈物を未亡人の家まで持っていった。少年たちは雪の降る中を通して、くずれ落ちそうになった玄関にやって来た。ドアをたたくと中からゆっくりとした足音が聞こえ、ドアが開かれた。

13才頃の特徴とも言える調子ばずれの声で、少年たちは「聖し、この夜、星はひかり」と歌い、それから贈物を渡した。昔、かの栄光ある夜に歌った天使よりも美しく歌い、贈物をした博士よりも大いなる贈物をしたのである。

私はこれらのすばらしい婦人たちの顔を見つめ、心の中で「だれかの母親である」と思い、気高い少年たちの表情を見た時、「だれかの息子である」という思いがはね返ってきた。

主はみ言葉の中でどのように言われたであろうか。「……これらの最も小さい者の

ひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

他に、思いやりのない言葉によって互いに孤立しあう母親、父親、息子、娘から成る「迷える大軍」もいる。このような悲劇をкаろうじて避け得た若者を紹介しよう。私たちはその若者をジャックと呼ぶことにしよう。

ジャックはそれまで、父親と何回もひどい口論をしてきた。ジャックが17才であったある日、2人は特に激しいけんかをしたのである。その時、ジャックは父親に「けんかもこれで最後だよ。ぼくはこの家を出ていく。絶対帰って来ないよ」と言った。そう言うと、ジャックは家にはいって荷物をまとめ始めた。母親が思いとどまるようにいくら頼んでも、あまり腹を立てていたのでその言葉を聞き入れることはできなかった。ジャックは玄関の所で泣く母親を残して出て行ったのである。

庭を過ぎてまさに門を出ようとした時、父親の呼ぶ声がした。「ジャックおまえが出て行く大きな責任はこのわしにある。心からすまないと思っているよ。家に帰りたかったら、いつでも帰ってきなさい。私たちは帰りを待っている。そして、わしはおまえにとってもっとまじな父親になるよう努力するよ。いつもおまえを愛していることを知ってもらいたい。」

ジャックは何も言わずにバス停に行き、遠くまで切符を買った。彼はバスにゆられ過ぎゆく車窓の景色を見ながら、父親の言った言葉について考え始めたのである。ジャックは父親がそのようなことを言えるくらい自分を愛してくれていたことがわかり始めた。

父親はあやまり、ジャックにもどって来るように言い、夏の空に鳴りひびくような「わしはおまえを愛しているよ」という言葉を残したのである。

その時、ジャックはこれから自分の取る行動が自分の責任であることに気がつき、またジャックが自分の内に安らぎを見つかるただ一つの方法は父親が自分に示してくれたと同じ、円熟したおとならしさとやさしさと愛を父親に示すことであるということがわかった。ジャックはバスを降りると帰りの切符を買って家に帰ったのである。

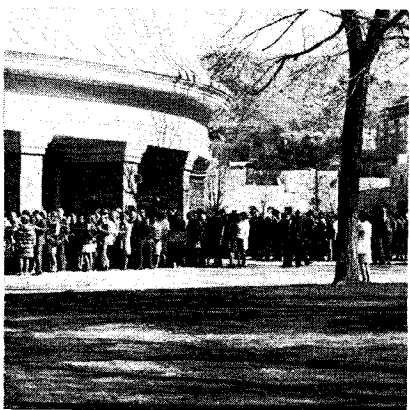
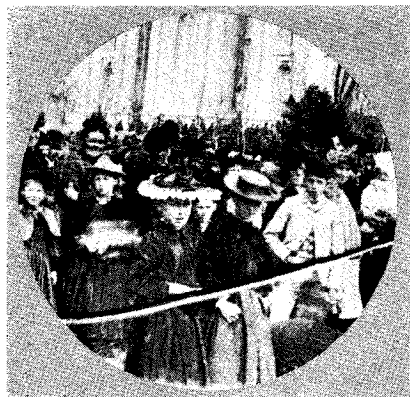


真夜中を少しすぎたころ家に帰り着き、家にはいってあかりをつけた。そこには、両手で頭をかかえてこんで揺りいすにすわっている父親の姿があった。彼は顔を上げジャックを見るといすからたち上がり、2人はかけ寄ってしっかりとだきあった。それ以後、ジャックは「私にとってそれ以後の年月ほど私の人生の中で幸福な年はありませんでした」としばしば言っていた。

少年は一晚にしておとなになったと言うことができるであろう。また、激情を抑え自尊心を抑制したこの父親は、息子が「迷える大軍」の一員となり、親子関係がくずれて家庭が崩壊する前に自分の息子を救い出したと言うことができるであろう。愛は固く結ばれたきずなであり、苦痛を和らげるものである。愛とは私たちがしばしば感じるものであり、まためったに言い表わさないものである。

シナイ山より私たちの耳に「あなたの父と母を敬え」(出エジプト20:12)とどろきわたる。また、「汝相愛して共にこの世に生きよ」(教義と聖約42:45)という同じ神からの命令がある。

「迷える大軍」は他にもいる。ある人は罪の密林の中でもがき、またある人は無知



という荒野の中をさまよっている。真実、私たちひとりびとりは人類の迷える大軍、まさに永遠の死に追いやられたとってさしつかえない者の中に数えられていたのである。

「……死がひとりの人によってきたのだから……アダムにあってすべての人が死んでいると同じように……」（Ⅰコリント 15：21—22）私たちはすべて死という経験を経る。そして、だれもこれを避けることはできない。もし私たちが救われないままにいるとしたら、求め続けた天国は失われ、愛し合った家族は失われ、親しく語り合った友人をも無くすであろう。この真理を悟る時、私たちは世の救い主の降誕に伴ってもたらされたこの上ない喜びに感謝し始めるのである。み使いによってもたらされた「彼女は男の子を生むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。」（マタイ 1：21）というみ言葉は何とすばらしいものであろうか。

フランスを流れるその川は第一次世界大戦中に「迷える大軍」を救出した人々の進軍を見守っていた。また、他のある川は万物の救い主、すなわち聖なる贖い主と導き

と教えを施す業が始められるのを見守っていたのである。聖典には「すると天から声があった、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心になう者である』（マルコ 1：11）と記されている。

今日では、ガリラヤ湖の湖畔に位置し、救い主の導きと教えを施す業の中心地であったカペナウムは破壊されている。主はユダヤ会堂で福音を述べ伝えられ、海辺にあって教え、家々にあっていやしの業を行なわれたのである。

ある機会に、イエスは（ルカ 4：18）イザヤ書から「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音に宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして、心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ」（イザヤ 61：1）という聖句を引用し、私たちが属する「迷える大軍」を救うために明らかに神聖な救いの計画があることを知らされたのである。

イエスがガリラヤでのべ伝えられたことはただ単なる前置きでしかなかった。人の子はゴルゴタと呼ばれる丘に向かって行くその時までつねに恐しい出来事に遭遇してこられたのである。

イエスは、最後の晩餐の後ゲッセマネの園で捕えられ、弟子たちに見捨てられ、つばを吐きかけられ、法廷に立たされ、はづかしめられて、カルバリへ向けてその大きな十字架を背負ってよるめきながら歩かれた。主は裏切られ、責められ、十字架上で死なれて勝利を得られ、進歩された。天父は私たちのためにその御子を与えたまい、私たちの長兄はその命を私たちのために与えたもうたのである。

主は最後の瞬間まで引き返すこともできた。しかし、主はそうされなかった。主は万物、すなわち人類、地球、また地球に住むあらゆる生き物を救うためによろずの物の下に身を落とされたのである。

マクダラのマリヤたちが主の遺体の世話をするために墓に近づいた時にみ使いによって泣き悲しむマリヤたちに語られた言葉よりも尊い言葉を、私はキリスト教の世界に見い出すことはできない。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか、そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」

（ルカ 24：5—6）

人類の「迷える大軍」すなわち過去に生まれ死んだ人々、現在生きておりいつか死を迎える人々、やがて生まれそして死ぬ人々、この迷える人類の大軍はこのみ言葉によって救われるのである。

主が私たちひとりびとりを永遠の死から救い出したもうお方であり、主が真理の教師であり、しかも教師以上のお方であることを私は証する。主は人生の完全なる模範である。しかも模範以上のお方である。主は偉大な医者であるが医者以上のお方である。人類の「迷える大軍」を救いたもうた主は文字通り世の救い主であり、神の御子、平和の君、イスラエルの聖者、よみがえりたもう主、そして「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり」（教義と聖約 110：4）と語りたもうたお方である。

主の証人として私は主が生きたもうことを証する。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。



「主が家を建てられるので
なければ……」

十二使徒評議員
ゴードン・B・ヒンクレー

永遠の結婚へのおや石

愛する兄弟姉妹、私はへりくだって聖
霊の導きを願っている。

この4月は、自然が再び活動を始める1
年のうちでもすばらしい時期である。4月
は約束の季節であり、美の時期であり、ま
た人が恋におちる時である。

けさ、私はりっぱな青年と美しい少女が
この建物に手をつないで歩いてくるのを見
かけた。彼女はダイヤの指輪をつけてい
た。4月が5月に、5月が6にかわる時
国中で多くの人々が結婚するように、この
2人もまもなく結婚するのであろうと私は
思った。

そしてその時、私は数年前ちょうど同じ
ようなカップルから結婚式を執り行なって
ほしいと頼まれたことを思い出した。2人
を仮にティムとスーと呼ぼう。2人はすば
らしい将来を約束された男女だった。2人
ともりっぱな家庭で育てられ、りっぱな教
育を受けていた。そしてお互いに深く愛し
あっていると言った。2人の式は神の神権
の権能のもとに宣言された永遠の祝福を伴
う忘れることのできないものであった。

何年かが過ぎ、2人の家庭には3人の子
供が生まれていた。表面的には幸福な家族
だった。しかし最近ティムとスーが再び私
に会いにやって来た。今度はそれぞれひと
りずつで、その顔にはほほえみはなく、涙
だけが見られた。彼らは離婚の相談に来た
のだった。かつて真剣に語られた愛の言葉
は今や非難の言葉に変わっていた。信じが
たいことだった。それは春の穏やかな日の
あとに突然おそってくる3月のひどい嵐の
ようであった。

「子供たちはどうしますか」と私は尋ね
た。スーは子供たちに両親の絶え間ない口

論を聞かせるより、むしろ離婚した方がよ
いのではないかと思うと答えた。子供たち
はもうそのような言い争いのおろかしさを
感じることでできる年令であるとスーは言
った。子供たちは、醜い傷あとを残す深い
痛手を負うほど感じやすかった。

ティムとスーの間には何があったという
のだろう。彼らと同じように、大勢の人々
には何が起きているのであろう。なぜ、
3、4組の夫婦のうちのほぼ1組がこの国
では離婚するのであろうか。

合衆国では毎年約40万組の夫婦が離婚し
ている。彼らは50万を越える子供たちの親
であり、この国の600万以上のおとなが現
在離婚しているか別居中である。

離婚は不可能ではないが、しかしかなり
難しい地方においてさえ、同じような病
癖、すなわち家庭内の不幸、別居、放縦、
不道徳かつ不法な関係等から生じる同様の
もののしりや退廃的な罪悪が明らかに見られ
る。

急増する少年犯罪の悲しむべき原因の1
つもここにある。文字どおり数百万の子供
たちは、親の愛がなく、また親の愛がない
ために子供をほうっておくような家庭の子
供である。また何億もの財産を食い尽くす
公共福祉費負担額の増大の根源もここに
ある。これは創世の初めより主が定められた
家庭のあり方を否定するものであり、ここ
から悲嘆と失敗が生ずるのである。

この問題をこれ以上長々と論じることは
さけよう。すべてはあまりにも明らかであ
る。むしろ私はこのような悲劇を避ける方
策について述べたいと思う。

結婚への夢と家庭を築くことに胸をふく
らませている方々へ、私は昔言われたこと

を繰返したい。「主が家を建てられるので
なければ、建てる者の勤労はむなしい……」
(詩篇127:1)

では、その家を建てるための4つのおや
石を今提示したいと思う。まだ他にもある
が、私は特にこれらのことを選んで挙げて
みたい。この4つのおや石はイエス・キリ
ストの福音に基づいており、容易に理解で
きるし、これに従うことも困難ではない。
ほんの少し努力しさえすれば、それらは十
分到達できるものである。もしあなた方が
夢に描いている家庭をこのおや石の上に建
てるなら、私は次のことをあなた方に約束
したい。すなわち、結婚生活の危険は消え
お互いの愛情は年を経ると共に深まり、あ
なた方は自分自身の子供たちが成長して持
つ後世の子供たちをも祝福することになる
であろう。そして現世での幸福と永遠の喜
びを知るであろう。

そのまず第1は、互いを敬うことであ
る。敬うとは、伴侶をこの世で最も大切な
友とみなすことであり、自分のわがままや
気まぐれに合わせるように無理強いできる
所有物や財産とみなさないことである。

パール・バックは次のように述べてい
る。「愛は強いることができない……。愛
は求めず、探さずとも天から来るものであ
る。」(『宝の小箱』P.165)

この尊敬の気持ちは、お互いが神の息子、
娘であって神の属性を若干付与されており
、各々にそれぞれの才能を伸ばし表現する
権利が与えられており、寛容と忍耐、理解、
礼儀正しさ、また思慮深い思いやりを受け
るに足る資格が与えられているということ
を認識することから生じる。真実の愛で問
題となるのは単なるロマンスではなく、伴

侶の幸福を心から配慮する気持ちである。

結婚生活で2人が共に伴侶として保つまずなは、平凡であり、時には屈辱なものにさえなりがちである。私は男性が時折自分のかたわらに立っている協力者が、大いなる創造という仕事に自分と共に携わっている神の娘であるという事実を思い出すことのほかに、結婚におけるこの友人関係を確実に高く、靈感あふれる水準に保つものはないと思う。また私は女性が、天父の息子が身につけている神性、また尊敬、賞賛、激励が寄せられる時に呼び起こされる神性を自分の夫が備えていることを重んじ望むことのほか、夫への愛を常に保つよい方法を知らない。このような態度こそが、お互いをたえず理解するのに役立つのである。

私が2番目に述べるのはきわめて簡単なことであるが、私はそれが大切な基礎になるものであると思う。より適切な言葉がないため、私はそれを柔らかな答えと呼んでおこう。

「柔らかな答は憤りをとどめ」（箴言15：1）と昔から言われている。

穏やかに話すとき、私たちはめったに問題を起こすことはない。私たちが声を荒立てた時にのみ、火花が飛び、小さなもぐら塚が大きな山となるほどの論争にふくれあがるのである。私はいつも予言者エライジャがバアルの祭司たちと争った時の描写に何か大切な意味を感じる。聖典には次のように書かれている。「大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後に地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。」（列王上19：11-12）

天の声は静かな細い声である。同様に家庭の平和な声も静かな声である。

結婚生活をする上で、私たちは自分の伴侶にではなく自分自身に対して多大の修練が必要である。

現在父親である人にとって、また将来父親になる人にとって、デビッド・O・マッケイ大管長の忠告ほど意味がある言葉はあまりないであろう。大管長は次のように述べている。「父親が子供たちになし得ることで、父親がその子供たちの母親を愛していると感じさせること以上に偉大なことは何もない。」

い。」

もし夫と妻がお互いに穏やかに話をするように訓練しあい、子供にもそのように話しかけるなら、家庭内の平安はどれほど増し、子供たちの生活の安全はどれほど保証されるだろう。これにより離婚や別居といった悲劇がどれほど減り、またどれほど大きな愛と喜びがもたらされるであろうか。

パウロは言っている、「父たる者よ。子供をおこらせないで……」（エペソ6：4）

私はもう一度繰返す。平和な家庭の声は静かな声である。

さて、安定した幸福な家庭を築く第3のおや石に移ろう。私はそれを神と人に対する正直さと呼ぶことにする。

弁護士であり、カウンセラーであり、また教会の指導者として長年の経験を持つ博識あるある人が、金銭問題は往々にして夫婦間に緊張をもたらし、その結果家庭内に悲劇が生じるとかつて私に語ったことがあった。

先ほど話した若い友は、妻がぜいたくで浪費家であるというて批難し、一方妻の方にはにがにがしい口調で夫はしまり屋で、かせぎが少ないとこぼした。ささいな金銭上の口論が2人を愛の破局に招いたのであった。

家庭を築く人とその家族にとって、予言者マラキを通して古代イスラエル人に与えられた戒めを守ることほど、実り多い祝福やよい訓練はほかにないことを私は確信している、「……十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」（マラキ3：10）

結婚には普通多くの義務が伴うものである。そこで私は、あなた方と私の若い友に助言申し上げたい。什分の一と献金を払うことによって、神に対して正直に生きることを第一の義務としなさい。あなたがたは神の祝福が必要となるであろう。神の祝福はどんなに必要なことであろうか。神は約束されたことを必ず果たされると、私はおごそかにあなた方の前に証する。この祝福の中には、家庭の平安と心の中に生まれる愛が含まれている。

まず天父への義務を果たすことから始めあなた方の財産を使う訓練をするなら、家

庭問題のごたごたの原因となる邪悪な利己心は、あなた方の生活のうちから消え去るであろう。なぜなら、あなた方が見えない主と分かち合うなら、あなた方は見るのできる人々に対してより親切に、より正直に、より寛大にふるまうことができるからである。あなた方が神に対して正直に暮らす時、あなた方はお互いに正直に生活するようになるに違いない。

さて最後に、第4のおや石として私は家族の祈りを提案したい。一日の始めと終りに共にひざまずくことほど、生活に有益な効果をもたらす方法を私は他に知らない。主の前にひざまずき、お互いの面前で互いのために神に感謝を捧げ、生活の上に、家庭の上に、愛する者の上に、また希望がかなえられるように共に主に祝福を求める時どういうわけか、結婚生活をおそう小さな嵐は消え去ってしまうのである。

そうすれば神はあなたのよき友となり、神との毎日の会話はあなたの心に平安をもたらし、他からでは決して得ることのできない喜びがあなたの生活にもたらされるであろう。あなた方の結びつきは年と共に強くなり、愛が強まり、相互理解はさらに深められるであろう。

子供たちは主の「みたま」が宿っている家庭に平安を感じるであろう。あなた方は教会が勧告したように、家庭に子供たちを集め、愛のうちに教えるであろう。そして子供たちは互いに尊敬しあっている両親を知り、彼らの心に尊敬の念が芽ばえ育つであろう。子供たちは穏やかに語られたやさしい言葉のうちに平安を体験し彼ら自身の生活に起こる嵐も静まるであろう。彼らは主に対して正直で、お互いに対しても仲間に対しても正直に暮らしている両親を知るであろう。また彼らは両親が祈りの中で、大きな祝福にも小さな祝福にも感謝を述べているのを聞いて、感謝の念を持って成長するであろう。そして彼らは生ける神への信仰を持って成人するであろう。

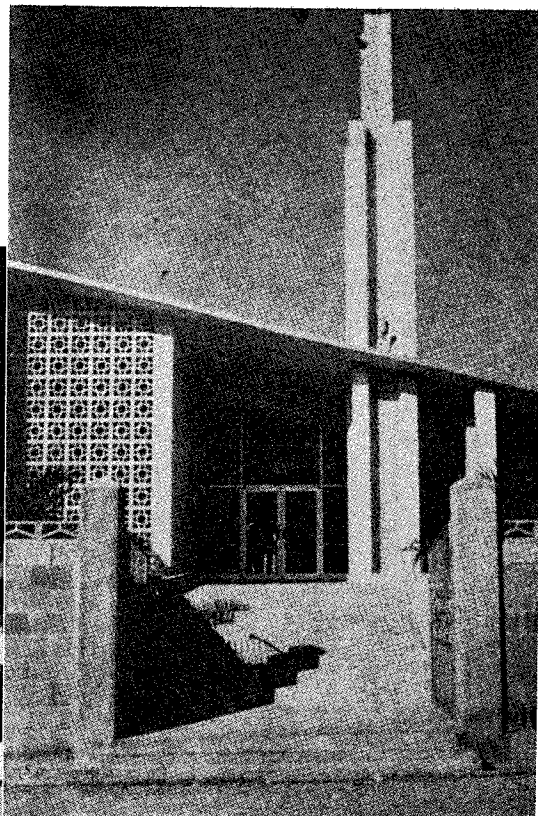
家庭の中に苦渋をもたらすさつりくの天使はあなた方を過ぎ越し、あなた方は永遠にまで延びる人生にあって、平安と愛を知るであろう。皆様方の上に大いなる祝福があらんことを望み、このことをイエス・キリストのみ名により、へりくだって祈りたてまつる。アーメン。

日本西部伝道部

だより



ユース・コンファレンスにおける沖縄地方部のコーラス



那覇支部教会堂

* * * * * 証 * * * * *

今年の7月頃私は沖縄を訪問された伝道部の指導者から沖縄の人々がひどい水不足で困っておられるということを伺いました。それ以後こちらで雨が降るたびに会社の同僚と嘆息しながらこう言ったものです。

「皮肉ね。沖縄で降ってくればいいのに。」その後も雨は一向に降らずユース・コンファレンスの頃は日本を縦断してあちこちで雨を降らせた台風も沖縄をよけて通り、一滴の雨も降らせなかったということです。こうして沖縄の水不足はますます深刻な問題になっていきました。

9月にはいり私たちは伝道部から5日の断食日には全員で、沖縄に雨が降り1日も早く水不足が解消されるよう祈るよう指示を与えられました。私たちが全員一致して真心から祈るならばきっと聞き届けられるでしょう。私たちは祈りました。ユース・コンファレンスである悪条件にもかかわらず大きな成果をあげ、愛と一致のテーマを達成する

ことができたように、きっとこの祈りが聞き届けられると信じて。

2, 3日後、沖縄地方部の指導者から一通の速達が参りました。その中にはこう書いてありました。

「……5日の断食日には私たち沖縄地方部のため雨が降るよう伝道部の皆さんでお祈りをして下さってありがとうございました。その日は朝から大雨になり今日まで全面給水になりました。……」

祈りは聞き届けられたのです。私は天父の愛を心から感じ、また信じて祈る時に必ずその祈りに答があるという証をさらに強めることができました。この伝道部の上に天父の大いなる導きとみたまがあり、靈感にあふれた指導者をこの伝道部にお送り下さった主に心から感謝しています。

これらの証と感謝をイエス・キリストの御名により申し上げます。アーメン。

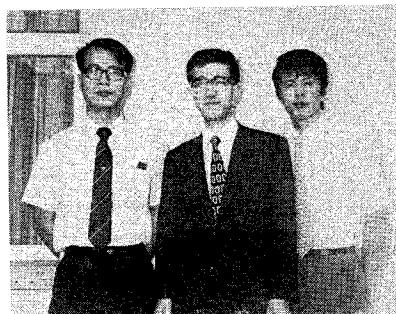
大阪支部, 大阪第二支部誕生

毎月30～40名の改宗者を出し、ここ2、3か月の出席人数も、平均230名にふくれ上った阿倍野支部が、9月5日、清水伝道部長の指導の下、2つの支部に分割され、その名も大阪支部、大阪第二支部と改名され、早くも大阪ステークス部への足がかりをつくりました。

大阪第二支部の地域は、住吉区、東住吉区の2区で、大阪支部は、この2区を除く大半の大阪市です。

大阪支部長に、神成弘昭兄弟が、大阪第二支部長には、中野正之兄弟が、それぞれ召され、按手任命されました。集会場は今迄の阿倍野支部の建物を共同で使用します。

大阪市の人々は約300万人、今後共、一層発展して行くことでしょう。



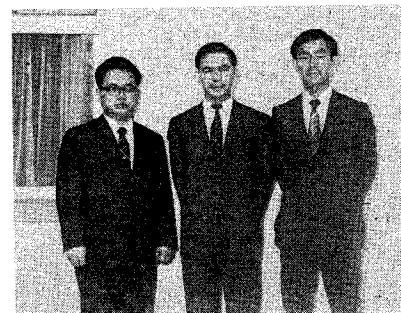
大阪支部長会

左から

第1 岩本正憲

支部長 神成弘昭

第2 玉野牧夫



大阪第二支部長会

左から

第2 服部昌和

支部長 中野正之

第1 浜田博之

MIA 大会 開 か る

去る8月12日より15日にわたって、例年のごとくMIA大会が開かれました。

312名の兄弟姉妹が、この大会に参加して、朝から夜迄、計画された数々のプログラムに参加、お互いの日頃の成果を競い、或いは楽しいプログラムに打興じて、お互いの親睦をはかり、信仰とあかしを強くしました。

今年は3年目でもあり、会員たちも大会にすっかりなれて役員の指示の下、スムーズに会は運ばれ、大成功の内に大会は終わりました。



開会式後の記念撮影



金沢支部ロードショウ

モルモン経を写本して

札幌支部 池田 つるよ
(松尾まさ子姉妹記)



池田つるよ姉妹が、この教会について知られたのは、横浜支部の会員であった息子さんからでした。将来息子さんと、教会の会員であるお嫁さんの家庭に入るであろうと考えられた池田姉妹は、息子さんの宗教を勉強してみようと思われました。息子さんにそのことを話されると彼はモルモン経をくださったので、姉妹は一年がかりで読んでみられました。けれど殆んど理解できなかったと彼女はおっしゃっています。

その頃池田姉妹の近所の方が家を貸すことになり、姉妹の名前で広告を出しました。その家を借りたいといって見に来られたのが、札幌支部の中田兄弟姉妹でした。結局彼らはその家を借りられませんでした。その時どちらからともなく、教会の話が出ました。池田姉妹がモルモン経を一度読んだけれど、理解できなかったことを話されると、中田兄弟姉妹は、「宣教師に来てもらいましょう」といわれました。池田姉妹はその時、そんなにしてまで勉強したいとは思われませんでした。それから2、3日後、2人の外人長老たちが彼女のお宅を訪問しました。彼女は外人を見られた時、びっくりされ、おじけづかれて、断わろうとされました。

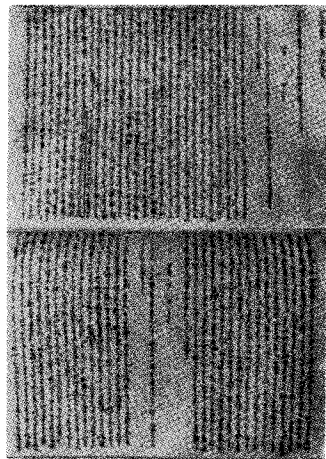
けれど最初のレッスンを聞かれると、知識欲が頭をもたげてきて、ものを知るということが楽しくなれ、急にもっともっと聞きたいと、強く望まれるようになりました。そして一生懸命勉強しなければと感じられた姉妹は、一度読んで理解できなかったモルモン経を写そうと決心されました。写して行ったら、きっと理解できるだろうと考えられたのです。



教会や信仰について勉強してゆかれるうちに、池田姉妹はこの教えの中にこそ、彼女の理想の世界があることを感じてゆかれました。他力本願で与えられるものをそのまま受けて行くだけの消極的な信仰、彼女が今まで信じて来られた仏教に物足らなさを感じ、無意識の中に、もっと積極的な力強さを持つ絶対神を求めておられた姉妹でした。モルモンの教えは、彼女の望みによく合っていました。よき人

の教えは、そのまま受け入れるという、仏教思想がしみ込んでおられた池田姉妹は、宣教師達の一見不思議な話も、そのまま受け入れようと努められました。

けれども、まだたくさんの疑問もあり、先祖からの宗教であり今まで信じてこられた仏教に対する心残りもあって、池田姉妹は頑固に宣教師達に質問を続けておられました。モルモン経を読まれ、写しておられる間、何度もバプテスマについて読まれ、その大切さもわかってこられました。そのうち、バプテスマを受けなければ、続けて読む資格がないような気持ちになりました。そしてモルモン経を写しておられる間、彼女の上に沢山の奇跡が起こりました。老眼で見えにくかった目がよく見えるようになり、肩が張ってできなかった洋服もできるようになりました。池田姉妹はいつの間にか、モルモン経を写し終えたら、バプテスマを受けようと決心しておられました。

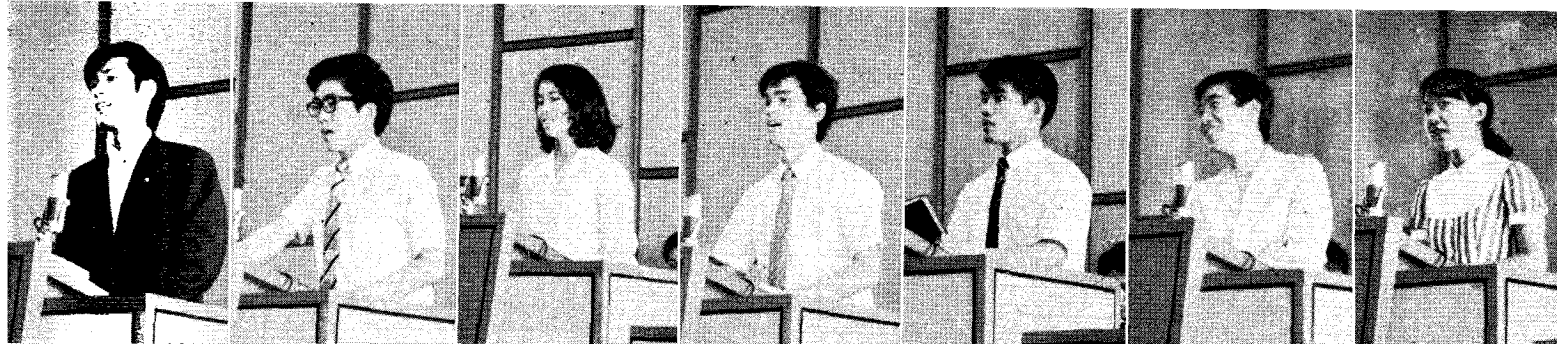


そして彼女と長い間勉強してきた佐々木姉妹の転勤の直前、池田姉妹は、正式に末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となりました。

池田姉妹は、すべてのことに感謝し、心から人のために働かれる素晴らしい方です。宣教師達にも、とてもよくして下さって、私達が集会の為にお伺いすると、いつもなつかしい日本のお料理を御馳走して下さいます。本当にお料理が上手です。



池田姉妹は、またよい宣教師でもあられます。御近所の方達や、お友達みんなに福音を紹介して下さい、現在彼女のお家に下宿している一人の兄弟が宣教師からレッスンを受けており、もうすぐバプテスマを受ける予定です。又もう一組の、子供さんのいない夫婦の方を、レッスンを受けられるよう、私達に紹介して下さいることになっています。



上. 多くの兄弟姉妹の力強い証が述べられました

ユース・コンファレンスは人を変えた

東京ステーキ部

9月に入って、各ワード部の若者たちは変わった。目の輝きが、態度が、笑顔が。

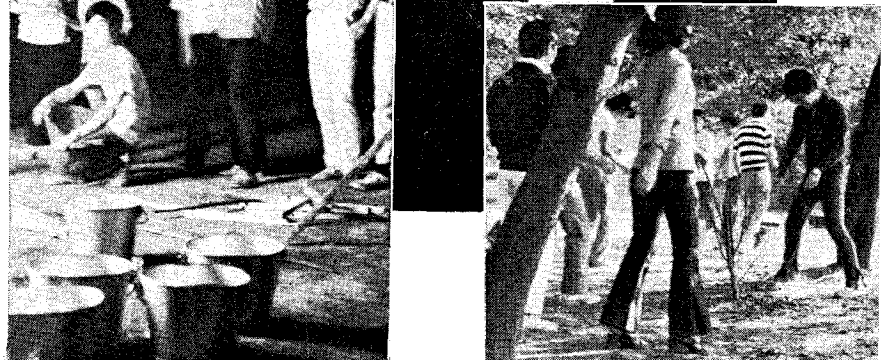
8月26日からの3日間、横浜で行なわれたユース・コンファレンスに参加した約80名の若人は新たに多くの証を身につけて各ワード部に帰ってきた。4つのセミナーは若者の心に深く刻み込まれた。「天文学と高価なる真珠」ではその神の偉大さに驚き、「英会話」では最後に全員が英語で証できるようになり、「デートの仕方」ではその楽しさを覚え「ダンス」では今まで知らなかったものを習得した。

自分たちの手で作った料理でディナーパーティーをし、歌を歌い、踊り、スポーツをしそしてみんな同じ場所で寝る。これが本当の兄弟というものであろうか。彼らは証をした。本当に一つとなって3日間を過ごすことができた。これらの証はかれらの道しるべとなり、自ら歩む大いなる道の光となることだろう。最後にかれらは口をそろえて言った。来年もぜひ参加すると。

ユース・コンファレンスは人を変えた。



上左.
セミナー
風景



下. ダンス

下. さあ、3日間がんばろう

右上. キャンプファイヤー
右下. ディナーパーティー



